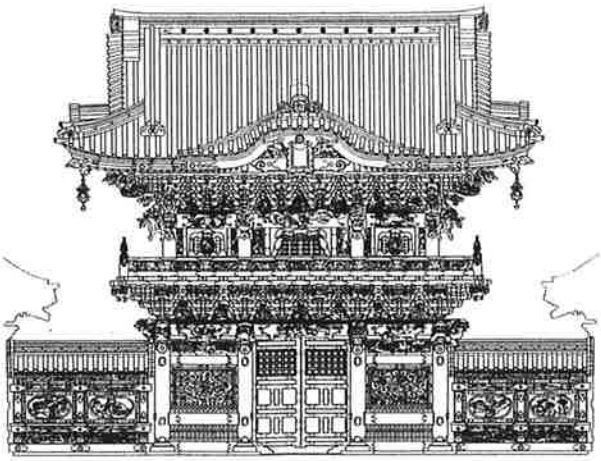
日本イコモス国内委員会

JAPAN ICOMOS INFORMATION

第4期　第12号　　2000年9月25日　発行



目　次

日本イコモスにおける理事会と事務局 …… 石井　昭　1
２０００年次第３回理事会（拡大理事会）報告 …… 石井　昭　2
CIAV（ヴァナキュラー建築国際専門委員会）報告 …… 前野まさる　6
研究会「近現代建築の保存について考える―第４回」 …… 田原幸夫　8
ブルガリアでの遺跡調査と世界遺産の現状について …… 金原保夫　10
Sboryanovo : investigations, discoveries and problems …… Diana Gergova　17
ベトナム民家の建築的特徴について …… 山田幸正　24
ベトナム木造民家文化財保存プロジェクト …… 友田博通・他　28
事務局日誌（2000/6/1～2000/8/31） …… 事務局　32
お知らせ － ７件 …… 田原・山田・西浦・松本・斉藤・石井　34

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE
ICOMOS
INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES／国際記念物遺跡会議

表　　紙　：　日 光 東 照 宮 陽 明 門
COVER　：　Nikko Tosyogu Yomeimon

日本イコモスにおける理事会と事務局

石井　昭

来る12月16日に開催される日本イコモス2000年次総会には「次期役員の選任」と「事務局の移転」という重要な二つの議案が上程されます。それに備え、いささか講義めいて恐縮ですが、敢えて今回は標記のテーマで拙文を綴ることにしました。

今期（1998－2000年）役員

職	氏名	在任	会務分担
委員長	石井　昭	２期	
理　事	稲葉　信子	１期	渉外
	上野　邦一	２期	庶務
	岡田　保良	１期	会員
	近藤　公夫	２期	会員
	田原　幸夫	１期	事業
	日高健一郎	１期	事業
	藤木　良明	１期	広報
	藤本　強	１期	副委員長
	前野まさる	１期	副委員長
	宮本長二郎	１期	会計
	宗田　好史	２期	広報
	安原　啓示	２期	事業
	山田　幸正	１期	広報
	渡辺　保弘	４期	事務局
監　事	石澤　良昭	２期	
	木原　啓吉	２期	
顧　問	伊藤　延男	２期	（名誉会員）
	稲垣　栄三	２期	（名誉会員）
	坪井　清足	２期	（名誉会員）

日本イコモス国内委員会規約によると、総会が選出する役員は委員長１名・理事17名以内・監事２名以内です。左の表をご参照ください。理事会は委員長と理事によって構成され、「総会が開かれていないとき総会に代わり活動する権限をもつ」とともに「日本委員会の活動計画の策定および執行」など「日常業務の処理に責任をもつ」機関です。

一方、監事は「理事会に出席して意見を述べることができる」という地位にあり「会務を監査し、その結果を総会に報告する」責任を負っています。

理事会メンバーの役割をいま少し見ておきましょう。委員長は「会務を統理」し「代表権」をもち「職務上 ICOMOS 諮問委員会の委員」になります。また総会ならびに理事会を「召集」します。理事については「委員長の指示を受け、会務を分担する」という極めて簡単な規定しか見えません。左表に記した会務分担は理事会内部での協議の結果です。ただし副委員長だけは別格で、「委員長が理事の中から３名以内の副委員長を指名する」との規定があり、「委員長を補佐し」「委員長に事故があったとき（中略）その職務を代理する」と明示されています。

顧問については用語上の説明が必要です。「特に日本委員会の発展に寄与した者を理事会の議をへて顧問とすることができる」という規定があり、最初に適用されたのは15年ほど前のことかと記憶しますが、当時から、該当者は「名誉会員」と呼ばれていました。私が委員長職に就いた 1995 年、３名の名誉会員を新たに推挙し、かつ理事会への参加をお願いしたとき、顧問という名を復活させました。従って現在の「顧問」は「理事会に所属する指導者としての少数の名誉会員」にほかなりません。

役員の任期は「３年を１期」とし「再任を妨げない」が「連続して３期を超えることはできない」と決められています。現在の役員は1998年１月に就任しましたので、本年12月をもって退任します。顧問についても運用で同等の解釈を採るべきでしょう。

さて、眼を事務局に転じたいと思います。規約には「日本委員会は事務所を東京都に置く」と１行にも満たない条文しか見られません。実状は会員の皆様がよくご存じの通りです。深い感謝の意を込めてここに明記しますが、我々の事務局は理事・渡辺保弘氏が主宰する（株）文化財保存工学研究所に無償で寄寓し、通信連絡、文書管理、金銭出納などの実務を所員・我妻綾子氏に頼っています。しかも、そうした状態が既に 12 年間も続きました。渡辺氏の理事在任が４期に及んでいるのは規約違反と言わねばなりませんが、ご承知の通り、これは「余人をもって代え難し」との理由から 1997 年次の総会で超法規的措置を決議した結果です。

今期の理事会にとって最大の懸案は「事務局の移転」でした。幸いにも、矢野和之氏のご厚意により、明年早々、それが解決します。次ページ以下に載せた「第３回理事会（拡大理事会）報告」の中に関係記事がありますので、ご一読ください。

2000年次第3回理事会（拡大理事会）報告

日本イコモス国内委員会の2000年次第３回理事会（拡大理事会）が去る７月22日（土曜日）午後１時から４時30分まで東京・神田の学士会館において開催された。出席者は委員長：石井　昭、理事：岡田保良・田原幸夫・前野まさる・宗田好史・山田幸正、顧問：伊藤延男、小委員会主査：益田兼房、事務局員：我妻綾子の各氏で、報告事項・審議事項は以下の通りであった。

I. 報告事項

1) INFORMATION 誌第4期第11号の発行

去る６月19日に発行した第11号は、通常よりも内容豊富で全40ページ。従来の＜報告・記録＞型から＜情報・論説＞型へと編集方針を改め、世界遺産関係３編（石井・本中・稲葉）と中東地域関係３編（西浦・松本・川床）を＜小特集＞として扱った。また、同号には大河氏がみずから進んで「Intangible Heritage をめぐる討論について － 2002年のイコモス総会に向けての準備の必要性」を寄稿された。氏に感謝したい。理事会はこの呼び掛けに応えなければならないと思う。－ 以上のように委員長から報告された。

2) US/ICOMOS INTERN PROGRAM 2000 への参加者

日本イコモス推薦の森田　守君（横浜国大・建築専攻・修士卒）が幸い採用され、本人から５月10日付けの礼状と７月10日付けの現地報告が届いている旨、委員長から報告があった。次いで〈 US/ICOMOS NEWSLETTER, MAY-JUNE 2000 〉の部分コピーが配布され、これによれば、本年、アメリカは16ヵ国から研修生を招き、10ヵ国へ研修生を送っていることや、森田君が H.A.E.R.Documentation Team for the St.Nicolas Anthracite Breaker in Pottsvill (Pennsylvania) に配属されたことも判る、との説明があった。

3) PAOAY CHURCH への MONITORING MISSION

ICOMOS本部（パリ）の World Heritage Coordinator, Henry CLEERE 氏から５月11日付けの書簡で標記の件について依頼を受けた。「 UNESCO World Heritage Center の要請により Paoay Church（世界遺産、フィリピン）の保存対策を検討する目的で 耐震工学の専門家を派遣したい。日本イコモス会員の中から適任者を選んで推薦してほしい」という内容である。人選の結果、花里利一氏（現職：㈱ 多治見エンジニアリング Chief Research Engineer）を推薦することとし、本人の内諾を得たのち、その旨を５月29日付けで回答した。花里氏は、イコモス本部、フィリピン・ユネスコ国内委、等との間で必要な協議を終え、正味１週間の日程で本日（７月22日）現地へ向かった。 － 委員長から以上の通り報告があり、これを理事会として了承した。

4) 国際専門分科委員会関係の会議

① LEGAL ISSUES 専門委
　５月３－６日、クロアチア、河野俊行氏出席、報告：INFORMATION 誌11号掲載済み。
② VERNACULAR ARCHITECTURE 専門委
　５月27－31日、ギリシア、前野まさる氏出席、報告：INFORMATION 誌12号掲載予定。
③ RISK PREPAREDNESS 専門委
　６月×－×日、オランダ、Voting Member 益田兼房氏に案内が届いたが欠席。
④ ARCHAEOLOGICAL HERITAGE MANAGEMENT 専門委
　９月14－16日、ポルトガル、小野　昭氏・岸本敏之氏出席予定。
⑤ WOOD 専門委
　11月16－18日、トルコ、伊藤延男氏・村上裕道氏・他出席予定。

⑥ CULTURAL TOURISM 専門委
12月１－２日、ギリシア、宗田好史氏出席予定。
⑦ UNDERWATER CULTURAL HERITAGE 専門委
12月または明年１月（未確定）、アルゼンチン、荒木伸介氏出席予定。

現時点で判明しているのは以上の７件である、と委員長から報告された。一方、上記の②に関連して、前野理事から「VERNACULAR ARCHITECTURE 専門委では来年または再来年の年次会議を日本で開催したいとの意向が強い」「引き受けるとすれば早々に準備を始めなければならない」旨が報告された。
なお、日本イコモスから委員を選出した専門委は上記以外に８種（STRUCTURES, HISTORIC TOWNS AND VILLAGES, TRAINING, HISTORIC GARDENS AND SITES, EARTHEN STRUCTURE, PHOTOGRAMMETRY, CULTURAL CORRIDORS, STONEの各専門委）があるので、 それらの今年次の予定はどうなっているのか、事務局から各当事者に照会することとした。

5) BULGARIA/ICOMOS との国際共同事業計画

前回拡大理事会（４月15日開催）で合意された方針に従い、標記事業の実現に向けて委員長（石井）が必要な準備を進めている。去る７月３日（月）～８日（土）、ブルガリアへ赴き、Todor Krestev 委員長を含むイコモス国内委ビューローメンバー５氏と協議を重ねたほか、同委員長を含む３氏とともに Plovdiv 旧市街-伝統的建造物群保存地区を視察し、現地関係者から実情を聴取した。また、文化大臣、Plovdiv 市長、等にも面会し意見を交換した。Plovdiv 旧市街は、同国の「世界遺産」最有力候補の一つでありながら、急激な体制変革（1990年）のため登録申請の機を逸し、過去 10 年間にわたり保存施策が講じられないまま荒廃の度を深めている。今回の訪問から得た結論を言えば、日本・ブルガリア両国イコモスの専門家がJoint Working Group を組織して参画するにせよ、重要建造物（多くが国有または市有の木造建築）の修復工事自体は同国の公営事業として実施されるべきものであり、日本政府の ODA（具体的にはユネスコ信託基金または文化遺産無償援助資金）の供与対象として採択されることが望ましい。外務省には４月以来、相談しているが、今後、詳細な資料を担当官に提出して協議を続ける予定である。できれば次回理事会に具体案を示したい。 － 委員長から以上の通り報告があった。

Ⅱ. 審議事項

1) 新規入会者および退会者の承認

入会者	現職	推薦者
金原保夫	東海大学文学部史学科教授	石井　昭・前野まさる
退会者	**事由**	
渡辺保忠	逝去　　７月19日付け書面により遺族から届出	

前回理事会（４月15日開催）以降、上表に示す１名の入会申込と１名の退会届を受理した旨、委員長から報告があり、審議の結果、両者を承認した。

2) 日本イコモスの組織に関する中長期的課題（継続）

継続審議を重ねた標記課題のうち最大の懸案は事務局の移転、すなわち「明年以降、事務局を誰に托し何処に置くか」であったが、熟慮の末、過日、文化財保存計画協会（株）社長・矢野和之氏にお引き受け下さるよう懇願したところ、快諾を得た。 － 委員長からこのような報告があり、審議の結果、次の通り決定した。

－ 2001年以降の事務局
日本イコモス国内委員会事務局を明年１月１日から下記へ移す。

〒150-0021　東京都渋谷区恵比寿西１－９－６　アストウルビル３階
（株）文化財保存計画協会　気付
Ｔｅｌ　　：　０３－５４５８－１８８１
Ｆａｘ　　：　０３－５４５８－１９０５
Ｅ－ｍａｉｌ：　ａｒｒｏｗ@ｂ－ｈｏｚｏｎ．ｃｏ．ｊｐ

－ その他の中長期的課題
最大の懸案であった事務局問題が解決したことを踏まえた上で、日本イコモスの将来像について引き続き審議する。なるべくならば審議結果を文章化して、年次総会に諮り、次期理事会（2001 -03年）への「申し送り」としたい。

3) 新設予定の 20TH CENTURY ARCHITECTURE 専門委への対応

ICOMOS本部からの正式通知はまだ届いていないが、標記の専門委がまもなく発足する見込みである。日本イコモスの代表委員に誰を選任するか、DOCOMOMOとの関係をどう調整するか、等について検討して欲しい。－ 委員長からこのように発議された。
次いで田原理事（事業担当）から以下の提言があった。（１）DOCOMOMO日本支部は現在設立準備中で、20名以上のメンバーが揃い、９月にブラジリアで開催される総会で承認を得れば、正式に発足する予定である。以後、有志を募りつつ徐々に活動を広げて行くことになろう。（２）最近、DOCOMOMOだけでなく UIAからも、日本のモダニスム建築・20世紀建築の代表的遺産を選定して欲しいとの要請が関係者のもとに届いている。６月24日に開いた「近現代建築の保存について考える－第４回」研究会では「こうした選定作業がユネスコの活動、とくに世界遺産の登録と、どう結び付いているのか、実情を知りたい」との声が出た。講師の野口英雄氏はこれに答えて「ユネスコは NGOの作業をコントロールする立場にはない。ICOMOS, DOCOMOMO, UIA 等は各々のイニシアティヴで活動しているのであって、それで良いと思う」と発言された。
今回の審議では以下の２項をもって結論とした。① ICOMOS 本部からの正式通知があるまで標記専門委への参加者の選任は保留する。② DOCOMOMO の予定メンバーでもある田原理事に今後もコーディネイターの役割をお願いする。

4) ICOMOS NEWS 誌の配布方法変更に関する本部からの要請

４月20日付けの書簡により ICOMOS本部の財務部長 Giora Solar 氏から「本部経費節減のため ICOMOS NEWS の配布方法を変更したい。 一括梱包して送るので各会員への配布は国内委員会の負担で行なって貰えないか」との照会があった。思案の末、６月５日付けで返事を書き、「日本イコモスとしての回答は７月22日開催の理事会で結論を得るまで延期する」「私見では、国際組織ICOMOSの一体性を保持するうえで、NEWSを本部事務局から各会員へ直送することに象徴的な価値があると思うので、賛成できない」「真に必要ならば郵送費を別途請求してはどうか」と伝えておいた。 － 往復書簡のコピーを添えて委員長から以上の通り報告された。
審議の結果、①日本イコモスの回答として前便と同趣旨の書簡を送る、②本部の方針が大多数の国内委によって支持された場合にはそれに従う -こととした。

5) ICOMOS <HERITAGE AT RISK> REPORT への寄稿

新会長 Michael Petzet氏が提唱した Heritage at Risk（H@R！）Project が、去る７月３－５日のミュンヘン会議をもって、軌道に乗った模様である。次のステップとして The first H@R! Worldwide Report を作成するとのことで、寄稿依頼が ７月17日付けの電子メールで届いた。添付された執筆要項によれば、１リポートは事例のイラストを含めて３ページ。提出期限は８月14日。候補に「神戸」の名も挙がっているので、放置せず対応方針を決めていただきたい。 － 以上：委員長発言。
審議の結果、寄稿者は益田兼房氏（RISK PREPAREDNESS 国際専門委 Voting Member）と

し、内容・構成ともに氏に一任することとした。

6) JAPAN ICOMOS 夏期研修国際交流事業準備（継続）

継続審議を重ねてきた標記の件について、前野まさる副委員長から「現況では無理が多い」との結論が示され、大要、次のような説明があった。

［計画内容］（１）対象者。US/ICOMOSだけに呼び掛ける場合と 他国のICOMOSにも呼び掛ける場合とを考え、10名程度（以内）の研修生を想定した。（２）研修期間。日本の建造物保存修復に関する講義・視察・実習を含め、約２ヵ月間を想定した。

［検討結果］（３）受入機関。文化財建造物保存技術協会ほかの保存修復事業所について検討した。研修は専門職員を対象にして補助金を得て実施しているのが通例で、外国人を加えることは困難である。また、保存修復工事は契約事業であるから契約外の研修を含めることは困難である。（４）資金。US/ICOMOS INTERN PROGRAM では、期間 21週間で、研修生各人に 4000 ドルを支給している。この例にならい、かつ事務経費・世話人経費を加えると約 150万円／人となり、総計 1000 万円以上が必要。単年度事業ならば助成金の目処が立つが、継続は困難である。（５）査証。研修参加者は収入を得ることになるので就労ビザが必要である。

以上の説明に続き、同じく前野副委員長から「この事業を民間財団に引き受けて貰う道もあるので、現在、某財団と折衝している」旨が付言された。

7) 当面の事業計画

－ 研究会

田原理事から、研究会「近現代建築の保存について考える－第５回」を11月末の土曜日に開催するべく、主題（DOCOMOMOの活動に関連するテーマ）の検討、講師の人選、会場の確保など、諸般の準備を進めつつある旨が報告された。

－ 文化財保護関連憲章等研究班（第１小委員会）

益田主査から、全国町並み保存連盟が作成した「町並み保存憲章」の最終草案が配布され、「連盟はこの憲章を本年10月の大会で採択する予定であり、日本イコモスの賛同と連帯署名を求めている。今後、どのように対応するべきか」と発議された。

審議の結果、以下の方針で臨むこととした。①連盟が採択を終えた段階で「憲章」を受け取る。②第１小委員会において内容を検討し結果を拡大理事会に報告する。③拡大理事会で連帯署名の件を審議する。④以上が遅滞なく進めば今年の年次総会に諮る。

－ 世界遺産条約関連問題研究班（第４小委員会）

来る10月28日午後５時半から ＜Intangible Heritage＞に関する研究会を催し、併せて小委員会の今後の活動方針について検討する。稲葉主査が ICCROM 出向中で不在のため準備を石井委員長に委ねることとした。

8) 第4・5回拡大理事会および年次総会の開催日時・場所

第４回拡大理事会：	10月28日（土）	午後１時～４時半	東京・学士会館
第５回拡大理事会：	12月16日（土）	午前11時～12時半	東京・学士会館
２０００年次総会：	12月16日（土）	午後１時～３時半	東京・学士会館
研究会：	同日	午後４時～７時	同上

第５回拡大理事会および２０００年次総会は、いったん12月９日を予定したが、会場の予約が取れなかったため、上記のごとく変更し決定した。

（理事会報告　文責・石井　昭）

CIAV2000（ヴァナキュラー国際専門委員会）サントリーニ会議報告

前野まさる

2000年のCIAV委員会は、1999年10月20日にMORELIAで開催されたCIAVの決定通りギリシャのサントリーニ島で、5月28日から30日の3日間の日程で行われ、参加国は54カ国中17カ国、37人強であった。

先ず、27日14:00にアテネ市のピレウス通りにあるギリシャICOMOS委員会ビルに参加者は三々五々ギリシャタイムで集合、その間2時間ほど、ギリシャICOMOS事務所のネオクラシック3階建ての立派な独立ビルを見学した。そこには専従職員が2人いて、会議室も3室ほどあり、ノールウェイ、フィンランド、オーストラリアの委員をうらやましがらせた。勿論、日本から見れば大変にうらやましい限りであることは云うまでもない。

15:30過ぎ、一行はバスでピレウス港に向い、17:00にフェリーボート・エクスプレスサントリーニ号でサントリーニ島に向った。

島には翌28日朝7:00に着く予定になっていたが、船は2:30に着き、船員に起こされ、寝不足のわれわれ一行は、7:00まで寝られる筈だとふて寝。遂に5:00に暗やみの港に放り出され、港の茶店のテラスでうたた寝。7:00の迎えのバスが来て、「ヴィラ・カリメラ」に行ったのはいいのだが、今度はチェックアウト前で部屋が無く、全員10:00過ぎまで待ちぼうけ。このように日程は初日から大きく崩れ、急遽アクトリーニ住居跡見学が入ったりして、まともな委員会がスタートしたのは夕刻からであった。

委員会は28、29日の2回あって、第1回は28日16:00より宿のヴィラカリメラでが行われ、その主議題は次の3項目であった。

1）ヴァナキュラー建築に関する出版問題
　2001年ならドイツ政府が出版助成をしてくれるので、今が出版のチャンスである。原稿の提出10％。使用言語は英語、仏語、スペイン語の三カ国語となるだろう。

2）ガイドライン
　charterをベースにしてガイドラインをつくる。

3）次年度、次次年度のCIAV開催国
　次年度はカナダ、2年後の2002年に日本でCIAVが開催できないか。

1）の出版問題は中々原稿が集まらず、なんとか本年末までに送って欲しいとの催促だが、未提出委員国不参加の会議では、一つ迫力に欠ける。3）の次年の開催もカナダが受けるのかどうかも判然としないが、マハットさんは「大丈夫カナダになるよ、だから日本頼みます」とのこと。この件は、大河先生も承知され、7月22日の拡大理事会でも承認されたので、これからその準備にかからなければならない。

第2回は翌29日午後、ティラの民俗博物館のそばのホールで研究発表が行われた。ギリシャ側発表者はフランス語発表かギリシャ語の発表をフランス語へ通訳するもので、私は全くフランス語を解せず困った。しかし、困っていたのは私ばかりではなく、英語圏委員もフランス語の報告が続く中でコーヒーブレークをしていた。

Dr. パレス（ギリシャ）はトルコとギリシャの合同町並み調査報告だが、トルコ委員を欠き、内容も特に新しいものではなかった。こうした合同調査をするならば、両国のヴァナキュラー建築の比較・近似性など国際協力の効果があるものであって欲しい。しかし、トルコ人とギリシャ人が協力したことは画期的だと思う。

ラールセン氏はスライドを用い、チベットラサの調査報告を行った。その中で「文化財の保存と公開は一体をなすもので分離できない。現在ラサでは旅行者の増加に伴い町の様相にゆっくりとした変化が現われている。過度のトゥーリズムは町をミュージアム化するかディズニーランド化する。これでは町でなくなる。」と、ラサのトゥーリズムの将来に心配していることを述べられた。

カナダ委員は障害者と環境についての報告をされたが、国連の障害者年に合わせ、その活用について述べられた。

マハット氏はカルチャーツーリズムについて、「ツーリズムは住民の問題ではない。地方政府が求めているものでツーリズムから４０％の収入を得る。チャーターで原則をつくり、それに従ってガイドラインを定めるべきである」ことを述べられた。

見学について

28日委員会の前にコイノティア城跡とアクロティリの住居跡の見学をし、委員会後サントリーニ山頂のプロフェットエリアス修道院の見学。案内はフランス語。英語の通訳を求めても５分ともたない。

29日、午前中ティラの民俗博物館の見学。１階は女性用の部屋と倉庫、作業場で、２階は男性に部屋と応接室。ハレムとセーラムルクのトルコの住宅構成に似ていて興味深いもの。また、昔サントリーニ島は水が貴重で、巾４ｍ奥行き10ｍの雨水を溜める地下室を設けていた。民家とは云え、結構上流の方の住まいでしょう。

30日、メッサリアのアルギオス邸はぶどう酒醸造で産をなした高級住宅。２リビング＋１ダイニング＋８寝室＋事務室の大邸宅。１階が台所と醸造所、２階が家族の住まい。19世紀後期の住宅で国の文化財。1997年の地震で損傷し修復したものである。次いでフィラの博物館で先史時代の発掘品とサントリーニ島の形成過程の説明を地元考古学者から受ける。

サントリーニ島はもとはネアカメニ島とパレアカメニ島をふくんだ広大な１島であったが地震で噴火口周囲が環状に大きく陥没し内海ができたと云う。サントリーニ島を有名にしている絶壁に建てられている住宅はこの内海に沿っている。

午後からティロシア島の村とネアカメニ島の火山の見学、どちらも140ｍの山登りとあり、山登りに参加したのは数人で、見学どころではなかった。現在でも蒸気と硫黄を吹く火口には、観光客が投げ捨てたボトルが散乱し観光とモラルの問題を考えさせられる。

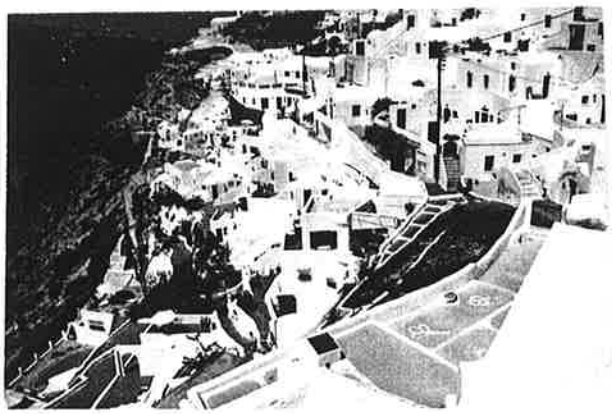
終幕

30日夜21:00からお別れ会。何か会議総括のようなセレモニーめいたものでも有るのかと思ったら、最初から楽隊入りのドンチャン騒ぎ、プールを囲んで全員輪になってのダンス。ギリシャのICOMOS委員には芸達者な人が多く、毎晩ギター抱えて歌と踊りが深夜までつづき、それが楽しみで委員会をしているようなものだった。北欧系の委員から「楽しいけれど、新しい事はなにもなかった」との評。私も同感である。

この他、ロビーの雑談から、フィンランドのジョージ・ウールストンの話によると、フィンランドでは、住民に歴史ある伝統的住宅の保存・再生・活用の重要さを伝えるためにコンサベーションセンターを各県毎に設け、そこにサンプル用の住宅を移築し、これを用いて保存修復・活用の手法を実物を通じて理解と指導が出来るようにしていると云う。これは中々良い方法で、こうした生きたヴァナキュラー建築の論議を進めて行きたいと思った。

ティラのCIAV会議

サントリーニ島の崖っぷちの住宅



踊り狂うお別れ会

＜研究会報告＞
近・現代建築の保存について考える
その４ ― ユネスコ世界遺産と近過去の建築

事業担当理事：田原幸夫

はじめに：

「近・現代建築の保存について考える」と題してシリーズで行ってきたこの研究会も第４回を迎えることとなった。当初、日本イコモスにおいても将来、「近過去の遺産」に対する取り組みが必要になるであろうことを予感しつつ、またこの分野においては「学」「官」「民」といった社会的枠組みを超えた活動が不可欠であると思われることから、JIA（日本建築家協会）のご協力もいただきながら手探りで始めた研究会であった。現在「近過去の遺産」の保存問題はいたるところで発生しており、状況は複雑かつ深刻である。また一方では、社会一般の歴史的環境への関心の高まりによって“世界遺産ブーム”のような社会現象も見られるのである。

おりしも、モダニズム建築に関する国際的活動団体である DOCOMOMO が、日本においてもその活動を開始し、日本における「モダニズム建築２０選」の選定、それをベースにした「文化遺産としてのモダニズム建築展」の開催といった実績を既に生み出している。また JIA には UIA（国際建築家連合）から、日本における「２０世紀の建築１０選」選定の依頼があり、JIA 独自の判断で、過日パリにおいて行われた UIA の会議にそのリストを提出したとも聞いている。

モダニズム建築を含む「２０世紀の建築」をわれわれは「文化遺産」としてどのように考え、また評価すべきなのか。世界遺産に２０世紀の建築や都市が登録されつつある現在、日本イコモスとしては先ず「ユネスコ世界遺産」と「２０世紀の建築」の関係に焦点を当てて考えてみようではないか、というのが今回の研究会の趣旨であった。講師に、「奈良コンファレンス」開催のために当時文化庁で中心となって活躍された益田兼房氏（東京芸術大学教授）と、長年ユネスコ本部において文化遺産に関わってこられこの４月に帰国されたばかりの野口英雄氏（都留文化大学教授）、両氏をお願いしたのもこうした趣旨によっている。

プログラム：

１）趣旨説明　　司会者

２）講演　　**＊オーセンティシティーに関する一考察**

「奈良コンファレンス」その後　　益田兼房氏（東京芸術大学教授）

＊20 世紀の建築と世界文化遺産

ユネスコ本部からのレポート　　野口英雄氏（都留文化大学教授）

３）質疑・意見交換

講演の概要：

益田兼房氏は多くのスライドを用いながら、我が国における近代建築の保存の現状について説明された。事例として、明治中期から昭和初期まで、レンガ造から RC 造まで、多岐に渡る事例を示され、それらの特徴的な保存手法につき解説をされた。筆者には、我が国の文化財行政における近代建築の保存理念、それも特に「材料」に関する考え方には微妙な変化があるように思われ、外観からは解らない材料の改変を、関係者はもっと積極的に社会に明示すべきであるとも感じた。また益田氏は、イコモスを中心とした保存に関する国際的宣言を資料として用意して下さった。それらは“再建行為”に言及している「ドレスデン宣言」（1982 年）、奈良会議後の宣言である

「サンアントニオ宣言」（1996 年）などであり、現在の世界の保存理念を理解する上でとても貴重なものに思われたが、時間の関係で十分な説明をしていただけなかったのが残念であった。
野口英雄氏は、ユネスコにおける長年のご経験をもとに、ユネスコにおける文化遺産への取り組みや、イコモスを始めとする NGO との関係につき説明された。特に我が国においては、前述した通りドコモモや UIA から、日本のモダニズム建築や 20 世紀の建築について選定の依頼があり、関係者の間からユネスコとこれらの団体の関わりについて客観的状況を知りたい、との声が出ていた。野口氏からはこの件に関して以下のようなコメントをいただいた。

1）ドコモモも UIA もそれぞれのイニシアティヴで、モダニズムあるいは 20 世紀の建築の選定作業に当たっていること
2）ユネスコとしては、それぞれの担当レベルではそれぞれの行為に関係しているのかもしれないが、ユネスコが指示をして、というようなことではない
3）一般的に（特に日本では）、文化遺産に関わる活動においては、ユネスコのイニシアティヴということがいつもイメージされるようであるが、ユネスコは NGO の活動を何ら規定するものではない。イコモス、ドコモモ、UIA がそれぞれのイニシアティヴで活動すれば良い

意見交換：
当日はイコモスや JIA のみならず、ドコモモの関係者も参加され活発な議論が交わされた。ドコモモの準備活動の中心になっておられる**藤岡洋保氏**（東工大教授）は「文化遺産としての評価基準は伝統的建築においても決して安定したものではなく、そうした意味において近・現代建築をことさら特別なものとして捉えることはない」と述べられた。また JIA の**篠田義男氏**（JIA 保存問題委員会委員長）は「現在 JIA からも 1920～1940 年代の建物について数多くの保存要望書が出されているが、そこでいつも問題となるのは耐震性を含めた保存のためのクライテリアである」と発言された。イコモスの**吉田鋼市氏**（横浜国大教授）からは「専門家は各事例の客観的情報から具体的内容を十分に勉強し、正しい知識を持つことが大切である」とのご指摘をいただいた。その他参加者から、近代化遺産の保存問題などについても話題が提供されたが紙面の関係で割愛せざるをえない。ただ討論の最後に**佐々波秀彦氏**（地域計画事務所代表）から以下のようなコメントをいただいたことを御報告しておきたい。佐々波氏は、ユネスコの外からユネスコの実体を理解することはなかなか困難だと指摘されつつ、ユネスコは発展途上国を含めた全世界的な政治的バランスの中で活動している政府間組織であることが各種 NGO の活動と根本的に異なること。また NGO による各種活動も含めて、文化活動というものはそもそも多様なものであるべきだ、とも述べられた。
最後に、当日配布された野口氏のレポートの中から、以下の言葉を抜粋させていただき今回の研究会のまとめとしたい。
『ユネスコ憲章とそれに続く幾多のプログラムは、建築を含む創造と蓄積のプロセスを支援する。ただしユネスコにおける権威付けを避けるのが賢明である。』

準備・運営にご協力いただいた方々に改めてお礼申し上げるとともに、次回への更なるご助力をお願いして研究会報告を終わりたい。

2000．06．24　　JIA 館　　参加者：３０名（内 ICOMOS 会員　９名）

ブルガリアでの遺跡調査と世界遺産の現状について

金原保夫（東海大学）

はじめに

本年 7 月に日本イコモス国内委員会に入会し、早速一文を寄せる機会を与えて頂いた事に感謝致します。ブルガリア人考古学者ディアナ・ゲルゴヴァ女史を通じて、ブルガリアでのイコモス総会（1996年）やプロヴディフ旧市街の建造物の保存修復への協力事業について知り、長年ブルガリアで遺跡の発掘調査に従事してきた者として、イコモスの活動に興味をもち、参加を希望した次第です。

本小文では、ブルガリアでの調査体験を踏まえて、特に1989年の政変による社会主義体制の崩壊以後の変化に注目しながら、遺跡調査と世界遺産を中心とする文化財の現状について報告する。

I. 遺跡調査

1．日本隊による発掘調査

東海大学トラキア調査団は、1984 年からブルガリア東部のデャドヴォ遺跡で考古学的発掘調査を続けてきた（PL. 1および地図参照）。この背景には同大学の創立者、故松前重義総長が推進してきた対ソ連・東欧社会主義諸国（いずれも当時）との文化交流があった。こうした民間外交の成果として、1971 年に同大学とブルガリア政府との間に学術交流協定が締結された。考古学的発掘調査も両者の学術交流の一環として始められたものである。

デャドヴォ遺跡は、直径140×220メートル、高さ18メートル（北部）のバルカンで最大規模のテル（遺丘）遺跡である。ここには銅石器時代（前５千年紀）から中世（12世紀）までの住居や城砦の遺構が幾層も積み重なっている。この遺跡の調査は、すでに1977年からブルガリアとオランダの合同調査として始められ、1984年から日本隊を加えた三国共同調査に発展した。当初の調査目的は、トラキア人の民族起源の究明にあり、そのために同民族の形成期にあたる青銅器時代の文化層を全面発掘するというものであった。調査では大小の環壕、多数の住居址からなる青銅器時代の集落構造や遺物資料からトロイとの関係を明かにするなどの成果があがっている。

デャドヴォ遺跡と世界遺産位置図

PL. 1　デヤドヴォ遺跡での発掘作業と基地の建物

80年代には多数の専門家と百人以上の作業員を動員する大規模な国家的プロジェクトに発展し、1987年には三笠宮崇仁殿下と同妃殿下もブルガリア訪問の際に同遺跡を見学している。この時、両殿下に同行したヨルダノフ副首相によって調査基地（PL. 1 参照）が提供されることになり、まもなく建設に着手された。しかしながら、この施設は1989年に始まる政変と社会主義体制の崩壊に伴なって屋根と外壁ができたところで予算が打ち切られ、ノヴァ・ザゴラ市の予算で何とか電気、水道等の生活設備が整えられたにすぎない。1993年から調査隊が利用できるようになったが、展示室は未完成のままで、地元が期待する博物館を備えた教育研究センターの完成の目途は立っていない。発掘調査自体もブルガリア側は、予算を確保することができず、日本隊の調査に便乗するかたちで共同調査が続けられている。このように1989年以降の変化は発掘調査にも直接大きな影響を与えている。

トラキア調査団はデヤドヴォ遺跡の発掘調査と並行して周辺遺跡の踏査を実施してきた。踏査はデヤドヴォ遺跡の周辺地域に始まり、ほぼブルガリア全域に及んでいる。社会主義政権下の踏査では、時には地元の警察に連行されたりもした。広い範囲が見渡せる遺跡の上や少数民族の居住地区等での写真撮影が問題にされたわけだが、そこに遺跡があるかぎり行くのは当然と考えている。踏査した中では、盗掘者によって無惨にも破壊された古墳や調査が中断し荒廃した遺跡、そして褐炭の露天掘りの現場で、巨大な掘削機に追われるようにして発掘調査が行われている遺跡などが強く印象に残っている。というのも、それらは、何れもブルガリアの遺跡や文化財が直面している問題に他ならないからである。

2．政治的変化と遺跡の保存状況

1989 年の政変以来、ブルガリアでは政治的混乱と高いインフレを伴なう経済のマイナス成長によって国力の低迷が続いている。このため文化活動への財政支援が激減し、遺跡の考古学的発掘調査や文化財の保存作業は深刻な財政難に陥っている。調査の中断を余儀なくされたり文化財の管理や保護が不十分になり荒廃が進み、さらに盗掘や盗難による被害も急増している。盗掘は昔から見られたが、最近では重機や爆薬を使って遺跡を破壊し、遺物を奪うという大規模で組織的な犯行が目立つ。例えば現地の専門家に案内されて踏査したカザンラク市近郊のロゾヴォ村の古墳は、石室の天井部を剥がされ玄室内がむき出しになり、石材が散乱し、盛土には重機の爪痕が生々しく残されているという、無残な状況

を呈していた（PL.２参照）。博物館に侵入して展示品を奪ったり、壊したりする例も報告されている。例えばスタラ・ザゴラ市内の新石器時代住居博物館も侵入され被害にあっている。

さらに、遺跡にとって不利な状況は、土地の私有化によって一層促進されている。私有地内の小規模な遺跡は、文化財であっても管理が難しく、所有者の意思で耕作されたり取り壊されたりするからである。文化財保護法も実際には十分な効力をもち得ない。こうした状況はユネスコの世界遺産に登録された文化遺産の場合でも例外ではない。次にこれらの文化遺産の現状をみることにしよう。

PL.２　盗掘者によって破壊された古墳

II. ブルガリアの世界遺産

ブルガリア国内には現在、９つの遺跡や地域が世界遺産として登録されている（地図参照）。それらは、次の２つの自然遺産と７つの文化遺産からなっている。ここでは文化遺産を取り上げて、保存状況をみていくことにしよう。

１．自然遺産

① スレバルナ自然保護区（北東部、ドナウ河畔、6km²、1983年登録）
② ピリン国立公園（南西部、ピリン山脈、264km²、1983年登録）

２．文化遺産

① カザンラクの古代トラキア古墳（前4世紀、1979年登録）
② スヴェシュタリの古代トラキア古墳（前3世紀、1985年登録）
③ ネセバルの歴史都市（前10～後14世紀、1983年登録）
④ マダラの騎馬像（8・9世紀、1979年登録）
⑤ リラ修道院（9世紀、1983年登録）
⑥ イヴァノヴォの岩窟聖堂群（13・14世紀、1979年登録）
⑦ ボヤナ教会（11・13・19世紀、1979年登録）

① カザンラクの古代トラキア古墳

このトラキア古墳は、ブルガリア中部のバラの谷盆地の中心都市カザンラク市内の丘の上に位置している。戦時中の1944年に防空壕を掘っていた兵士によって偶然発見された。発見当時、既にはるか昔に盗掘者が内部に侵入し、副葬品を奪い去っていたが、天井部分に見事な壁画が残されていた。壁画の発見によって、この古墳はトラキア芸術を代表する壁画古墳として世界に知られることになった。玄室内の壁画は特に有名で、前４世紀のトラキア貴族の葬送儀礼がヘレニズム絵画の技法を用いて鮮やかな色彩で表現されている。さらに、最上部に描かれた疾走する３台の戦車は、「トラキア人の葬儀の際には様々な競技

PL.３　カザンラク古墳の保存用建物

が催された」と伝えるヘロドトスの記述と合致する。

石室部分はユネスコの援助で石造りの建物で覆われ、空調設備で温度と湿度が一定に保たれるなど、十分な保護対策が講じられている（PL. 3 参照）。また、特別に許可された者以外入室できず、見学者には古墳に隣接して 1975 年に造られた石室のレプリカが用意されている。従って、この古墳は保存状態が極めて良好であり、かつカザンラク市の観光開発にも貢献しているといえる。

② スヴェシュタリの古代トラキア古墳

このトラキア古墳はブルガリアの北東部、イスペリフ市の北西約 5km に位置するスヴェシュタリ村にある。同村を含むズボリャノヴォ地区は、先史時代から中世までの多数の遺跡が存在し、80 年代から考古学プロジェクト「ゲティカ」が始まり、現在、ディアナ・ゲルゴヴァ女史が責任者として調査を指導している。この地域は古代にはトラキア民族のゲタエ族の領域に属しており、遺跡の性格から政治および宗教的中心地として位置付けられる。古墳の集中地域は、泉を中心とするサンクチュアリ（聖域）に属している。

スヴェシュタリ村には 26 基の古墳があり、最大規模の墳墓（高さ 11.5 m）が世界遺産に登録されているギニナ古墳である。1982 年の発掘調査によって、半円筒形天井をもつ３室構造の石室が未盗掘の状態で発見された。室内には男女の被葬者と副葬品、殉葬された５頭の馬などがみられる。さらに壁面は 10 体のカリアティド（女人柱）に似た石像と騎士に月桂冠を捧げる女神を描いた壁画で飾られている。

ギニナ古墳は 1985 年に世界遺産に登録され、コンクリートのドームで覆い空調設備による保存措置が講じられ、現在も内部の調査・記録作業が続けられている。カザンラク古墳とは異なり、壁画部分が少ないので、一般への公開が期待される。

古墳が集中しているズボリャノヴォ地区では、近年、古墳の盗掘が急増し、昨年だけでも二十数基が被害にあっている。その一因として、進行中のプロジェクトが予算不足のために定期的な調査ができず、遺跡の管理が不十分になっていることがあげられる。

③ ネセバルの歴史都市

ネセバルはブルガス市の北東約 35km、黒海の沿岸リゾート「スランチェフ・ブリャク」の南端に位置する長さ 850 m、幅 300 mの小島で、400 mの砂嘴で陸と繋がっている。トラキア人の集落に始まり、前 6 世紀にはギリシア人によって植民市メセンブリアが建設され、以後ローマ帝国、ビザンツ帝国、ブルガリアの支配下で軍事拠点および港町として繁栄した。このため、島全体が歴史博物館で、60 年代に建築・都市建設・考古学的保存地区に指定された。特に注目される歴史記念物は、古代後期から中世を通じて建設された教会である（PL. 4 参照）。最盛期には約 40 もの聖堂が立ち並んでいたと伝えられるが、現在では 10 の教会が修復保存されている。その他に城門や城壁の一部が残されているが、海岸近くでは浸食によって海中に没した遺構もある。

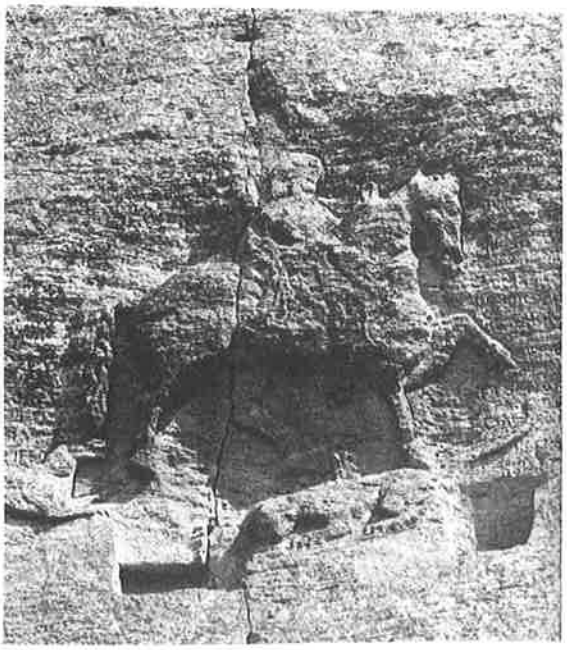
PL. 4 ネセバルの聖イヴァン教会

歴史都市ネセバルの問題は、文化財や景観の

保護と観光開発の関係にある。有名なリゾートの一角に位置しているため、島には保養客をはじめ、多数の観光客が訪れる。観光客相手の飲食店、みやげもの屋、民宿も増え、夏には狭い島が観光客であふれることになる。島全体が遺跡であるため、観光施設の建設が文化財の破壊を招くことになる。建物の中に遺構を取りこんで展示室とする方法も試みられているが、全てに適応されるわけではない。
ネセバルの行政管轄権は、地元の自治体に帰属しており、財政難を打開するために開発を優先する傾向が指摘されている。

④ マダラの騎馬像

北東ブルガリアのシュメン市から東に約15km、マダラ村の切り立った岩壁に騎馬像が彫られている。「マダラの騎士」と呼ばれるこの摩崖浮彫には、槍で獅子を狩る騎士とその獅子を踏みつける馬、その後ろに従う犬が彫り込まれ、製作当時には赤の漆喰で彩色が施されていた（PL.５参照）。さらに浮彫の前後と下の３ヶ所にギリシア語の碑文が刻まれているており、芸術性に加えて、史料的価値を高めている。第１次ブルガリア王国の第２代カンであるテルヴェル（在位 701 － 718）の時代につくられたと思われるが、正確な製作年、人物の特定、目的などに関して定説はない。しかしながら、このような摩崖浮彫は、同時代のヨーロッパには存在せず、獅子狩図のモチーフと合わせてオリエント、特にペルシア文化の影響が考えられる。なお、この摩崖一帯はトラキア時代からサンクチュアリ（聖域）であり、この騎馬像にも宗教的な意味が含まれている。高く聳える断崖から、北の彼方に首都プリスカを眺める騎士を中世ブルガリアの守護神（聖戦士としてキリスト教信仰にも通じる）とみなすこともできよう。



PL.５ マダラの騎馬像

騎馬像は碑文も含めて、脆い砂岩である上に、自然の風雨晒され続けたため、摩滅と崩落の危険に直面している。騎士の表情や馬の顔、衣装や馬具、文字等は風化が進み、中央部分にはクラックが走っており、早急な保護対策が求められている。長年、騎馬像の保存方法が論議されており、最近、具体化しつつあるが、外国からの資金ならびに技術援助に大きな期待が寄せられている。

⑤ リラ修道院

首都ソフィアの南方、約 45km のリラ山脈中に隠者聖イヴァンを開祖とする修道院がある。現在の建物は 1833 年の大火の後、再建されたものだが、聖母昇天教会の脇に立つ石造りの塔だけは、1335 年の建設当時の姿を伝えている。それは寄進者に因んで「フレリョの塔」と呼ばれており、最上部の礼拝室の壁にはキリストや聖人とともに楽器を奏で、踊りに興じる民衆の姿が描かれている。また、修道院に付属する博物館では国王やスルタンの勅許状、中世写本、精緻な透かし彫りの十字架等の貴重な所蔵品をみることができる。さらに院内には特定の地方が寄進して設けた地方巡礼団のための部屋が用意されている。

リラ修道院は観光地であると同時に修道士が厳しい修道生活を続け、信仰を深める場で

ある。しかし、本来の役割を担うべき修道士は減少し、高齢化が進んでいる。今、この大修道院で修行する修道士はわずか6人に過ぎない。300 人を超える修道士が修行し、ブルガリア各地から多数の巡礼者を集め、活気に満ちていたころの修道院の姿は、最早ここにはない。後継者不足はブルガリア各地の修道院に共通の深刻な問題であり、人手も財源もない修道院は荒れるに任せるしかないのが現状である。

⑥ イヴァノヴォの岩窟聖堂群

ドナウ河畔の都市ルセから南に約 20km、ルセンスキ・ロム川の谷間にブルガリア最大の岩窟聖堂群が存在する。イヴァン・アセン2世（在位 1218-41）の治世に修道士ヨアヒム（後のタルノヴォ総主教）が聖堂を建立して以来、巡礼地として知られるようになり、多くの信者や修道士が集まり、自然の洞窟を利用して 300 もの独居房、聖堂、修道院が設けられた。第2次ブルガリア帝国時代（1187 - 1396 年）には、宗教および文化の中心地の一つとして発展した。しかしながら、首都タルノヴォがオスマン軍によって陥落し（1393 年）、ブルガリアが征服されると宗教や文化活動が衰退し、イヴァノヴォから修道士が去り、聖堂は廃墟と化して人々から忘れ去られていった。その後、一部の壁画がタルノヴォ派の画家の作品として認められると、ボヤナ教会の壁画と同様、芸術性を高く評価され、イヴァノヴォの岩窟聖堂群の価値が認識されることになった。

岩窟聖堂は厳しい自然環境の中に長期間放置されていたため、壁画の傷みは深刻で、それらの3分の2が剥落したといわれる。主な聖堂は鉄格子で囲われているが、中の中世壁画の修復や保存措置は不十分なままである。また、最近、土地の私有財産化が進み、聖堂群の管理にも問題が生じている。遺跡の点在する渓谷全体を歴史保存地区に指定するなどの措置を講じる必要に迫られている。

⑦ ボヤナ教会

ソフィア市の中心から南約 8 キロメートル、ヴィトシャ山麓のボヤナ地区のプラタナスやセコイヤの木立の中にボヤナ教会が建っている（PL. 6 参照）。褐色の外壁をもつこの教会は、建築時期の異なる三つの聖堂からなっている。東端部が最古の聖ニコラオス聖堂で、1048 年に建立された。次に、ソフィア地方の領主カロヤン侯が家族の礼拝堂と墓所として聖パンテレイモン聖堂を 1259 年に建てた。その入口は2階部分に設けられている。最後に 1845 年に新たな聖堂が西側に増築された。ボヤナ教会自体は小さな聖堂に過ぎないが、内部を飾る壁画に高い芸術的価値が認められる。特に中央の聖パンテレイモン聖堂の

PL. 6 ボヤナ教会　三つの聖堂が合体している

PL. 7 鋭い目つきで見つめる聖エヴレム

壁画は、タルノヴォ派の画家が描いたもので、それまでのビザンツ絵画をモデルとする伝統様式の枠を越えた写実的な人物表現によって、個性的で表情豊かな人物像となっている。中でも生気に満ちた領主カロヤンと妻のデシスラヴァ、それに鋭い眼光で見つめる聖エヴレム（PL. 7参照）等に、タルノヴォ派の特徴がよく示されている。

この教会の修復工事は戦前から続けられてきたが、初期のコンクリートやニスによる不適切な補修によって損傷が増した。さらに狭い堂内に多くの参観者が入ったことも、壁画の保存状態を悪化させる原因となった。このため、1970 年代に入場者数を制限し、さらに同年代末には保存作業のために完全に閉鎖され、ユネスコの援助で空調設備が整えられた。現在も壁画と建物の総合的な修復作業が続けられており、一般への公開が待たれている。

おわりに

以上、1989 年の政変以降の変化に注目しながら、ブルガリアでの遺跡調査と世界遺産の現状について紹介した。1989 年に始まったブルガリアの民主化を求める政治改革と市場経済への移行という大きな変化は、当然、この国のあらゆる分野に大きな影響を与えている。ここに述べたように、遺跡の調査や文化財の保存修復といった文化活動は、厳しい状況に置かれている。しかし、ブルガリアには有能な専門家がたくさんおり、経済的な問題さえ解決できれば、文化活動を軌道に乗せることは十分に可能であろう。今後は文化財の保存修復にも注目しながら、ブルガリアでの共同調査を継続・発展させていきたい。

また、いずれ機会があれば、プロヴディフの歴史や魅力について記してみたい。

参考文献

東海大学トラキア発掘調査団　1986 年　「デャドヴォ遺跡（ブルガリア）発掘調査概報（1985）」『バルカン・小アジア研究』12、以下　同デャドヴォ　1986、1987、1988、1989、1990、1993、1994、1995、『バルカン・小アジア研究』13、14、15、17、18、19　デャドヴォ遺跡（ブルガリア）第 11 次発掘調査報告（1997）」Djadovo Studies 1、同　1998、Djadovo Studies　2、「ブルガリア・デャドヴォ遺跡の発掘（1997-1999）」2000、科研費研究成果報告書

禿　仁志「ブルガリア、デャドヴォ遺跡の発掘調査－国際共同調査の一実例－」『学術月報』Vol.52,No.1,28-34 頁

『ユネスコ　世界遺産 9　南東ヨーロッパ』講談社　1997 年　118-165 頁

SBORYANOVO. INVESTIGATIONS, DISCOVERIES AND PROBLEMS

Diana Gergova,
Head of the investigations in Sboryanovo,
Institute of Archaeology with Museum , Bulgarian Academy of Sciences

The National Sboryanovo reservation in NE Bulgaria , where the last Bulgarian monument included on the UNESCO list of the World Cultural Heritage in 1985- the Sveshtari tomb is located, is one of the most interesting examples of the diversity and richness of the cultural heritage of Bulgaria and its intangible values.

The reservation , declared in 1988, with an area of about 16000m^2 protects rare creations of nature and man and covers one of the greatest concentrations of archaeological sites in the country. The most notable of them belong to the culture of the Thracians - more than 100 tumuli, vast areas surrounded by stone walls, cult places, sanctuaries and others, dated to the 1st mill.B. as well as important sites from the Praehistoric, Roman and the Mediaeval periods. In the canyon of the Krapinec river only at about 50 km from the Danube and about 120 km from the Black sea coast lie the springs which supply the water for large regions of Northeastern Bulgaria. Among the picturesque karst formations and caves , rare plants and birds, included in the red data books of Bulgaria and Europe, and plenty of game, monuments of different periods have left signs of existence at that sacred place. Its name Sboryanovo. meaning place for gathering. as well as many other toponyms reveal the role of this sacred area where people gather and perform rituals in the area of the alian monastery Demir baba teke .Fig1.

Three other UNESCO monuments are located in the same part of the country-the Ivanovo rock-cut churches, the Madara horseman and the Srebarna Natural reservation. The biggest Voden National Hunting park is in the vicinity

The significance of the complex for studying the history of the country had always attracted many specialists, and Demir Baba teke considered to be the tomb of the Bulgarian khan Omurtag was one of the first monuments to be declared as a National Heritage in 1925.

Large- scale excavations started after the discovery of the Sveshtari tomb in 1982 by the Institute of Archaeology of the Bulgarian Academy of Sciences with Prof. M. Chichikova as a head of the expedition, in close collaboration with the Institute of Monuments of Culture and other specialists.

THE SVESHTARI TOMB

The Sveshtari royal tomb was one of the most sensational discoveries in the field of the Thracian archaeology and the Hellenistic architecture. It has three chambers covered by independent semi-cylindrical vaults. The burial chamber demonstrates a unique architectural decoration in real Doric style, combined with sculptural decoration of 10 caryatides images of the Mother Goddess in high relief and a painted scene on the lunette showing the deification of the king-horseman in the world. Fig. 2 The naiskos is also the only one known till now which is an archaeological reality.

EXCAVATIONS, INTERDISCIPLINARY APPROACHES AND PROTECTION

This unique discovery raised a vast range of problems of both scientific and applied nature. What was the cultural context of the tomb and how could the launched hypotheses about the astronomic planning of the tumuli be explained. The investigations of this big and to a certain extent unique agglomeration would throw light on unknown aspects of the Thracian civilization. The aims of the team were a thorough study of all components of the agglomeration and its development in later periods , the creation of best conditions for most efficient conservation and restoration activities and for original approaches in the presentation of the monuments .Application of interdisciplinary methods and diminishing the application of the destructive archeological methods where possible were the principles of the team. The approach meant also the preservation of the newly discovered monuments when possible in their natural environment.

Work on the archaeological map of the area in scale 1:2000 was made by applying areal photogrammetry and a digital photogrammetric model was elaborated for the entire territory, for the adding of newly discovered or excavated sites and data about their state of preservation.. .

Geophysical electrical prospecting was preceding all types of excavations. Magnetic, seismic and other methods were also applied experimentally. New instruments as Swedish Terrameter was used for the first time during the prospecting of the highest tumulus of the necropolis- the Big Sveshtari tumulus which is now in process of excavation.

For the excavations of the Hellenistic cemetery and at first finishing the investigation of the Northern group of the Eastern cemetery where the Sveshtari tomb was located , a more efficient and inexpensive method was elaborated. It was based on the possibilities for accurate localization of tombs under tumuli by geophysical methods. Profiles were oriented through the most characteristic features of the tumuli, along the axis of the tomb and perpendicular. Fig.3.

For the better protection of the discovered monuments and shortening the time of their exposure under atmospheric conditions a special soil curtain could be left. Earlier microbiological tests and other observations on the newly discovered tombs, as well as proper decisions about the type of the protection buildings could be taken in time. Comparative studies on aging processes could be carried out, having in mind the different approach to the protection of the different tombs. No rough changes in the microclimate of the tomb under tumulus 13 preserved in its natural environment had occurred for more than 10 years., showing the efficiency of the new solutions for protection. Fig.4,5

. Archaeoastronomical analysis showed that the axis of the Sveshtari tomb was directed to the first sun ray on December 22nd in 4th c.B.C.. the orientations of all the other tombs were determined by observations of the Sun and the clusters of mounds largely coincide with the mirror image of part of the brightest stars in the constellations Canis Major, Canis Minor, Orion, Taurus, Saggitarius.

Bulgaria is a country of high seismic activity. The paleoseismic studies of the deformations of the tombs and of their environment, provided by Bulgarian and Italian specialists lead to the identification of an earthquake of 7,7 degrees and of its epicenter only 60 km to the east of the

site, dated to the beginning of the 3rd c B.C. This contributed both to reconstructing the historical and natural processes and completing the data base on the country seismic activity as well as to giving important information for the solution of problems of the protection of the cultural heritage in this seismic area. Special Italian instrument for microseismic monitoring was installed for a certain period.

THE DISCOVERIES

The investigations radically changed the notion about the scope and the structure of the Thracian center and capital of the Getae , created in the beginning of the Iron age , about 11 th c.B.C. It was reconstructed about the middle of the 4 th c B.C. It expanded on two levels in the valley of the river and on its two high banks and in three circles. Almost in its geometric center is situated a complex of two sanctuaries. The first one -with megalithic altars and little adyton for a clay omphalos and two clay platforms for gifts- in the valley of the river in the court of Demir baba teke was connected with the other one – on the high cliffs called Kamen rid-with many ritual fire places, pits, and two stone circles Fig. 6..7

.The Hellenistic town with a double stone wall, streets, workshops and houses on the Eastern bank – Fig.7 and the royal residence with halls for feasts in the rivers valley can be also seen here. Stone constructions of symbolic character excavated in the areas between the river banks and the tumuli as well as a long wall form the second circle. The clusters of tumuli with one or three tombs in the center covering human burials, animal sacrifices, gifts or altars and planned as mirror images of the brightest stars in some constellations are surrounding the heart of the agglomeration in radius of 2000 m. to the North and to the South .The method applied gave ground to new hypotheses about the phenomenon of the empty or plundered tombs in Thrace which now could be treated as tombs-temples for the specific rites of the immortalization and its astral aspect reflected by the planning of the necropolis. The two tombs under tumuli 13 and 12 with the only sliding doors on the Balkans were demonstrating specific cultural relationships with Caria and Lycia in Asia Minor.

The Thracian agglomeration and and capital of the Getae demonstrated a high level of knowledge in mathematics and astronomy, architecture and arts devoted to the creation of this royal center as a mirror reflection of the celestial order subordinated to the idea of full harmony with Nature and according to the demands of the Thracian Orphic ideology of the metempsichosis and the institution of the king-priest. It could be identified with the "City of the wolves or Dausdava of the Roman geographer Kl..Ptolemy and the Hellenistic residence of the Getic kings Helis.

THE TRADITIONS OF THE SACRED PLACE. THE INTANGIBLE HERITAGE.

Sboryanovo is now a sacred place both for Christians and Shiites, celebrating together St Ilias day and performing authentic rituals in the same places where excavations show they were performed 3000 years ago Votive plaques of the Thracian horseman , an early Christian inscription, several Protobulgarian tumuli, the only Jaina statue from Bulgaria dated to 11 c. and the solar symbols carved on the blocks of the stone fence of the teke- which incorporates the Thracian rock altar show continuity of the religious traditions. Formally different religions are connected with this sacred place but they belong to one and the same

model and are rooted in the Thracian and ancient concept about the immortality of the soul in the frame of the ancient solar-chtonic cult. Authentic rituals of adorning the trees, sacrificing animals and donating candles, of original music and ritual behavior at Demir baba teke are the intangible heritage of the reservation.

PROJECTS AND PROBLEMS

Rare natural, historical and sacred landscape, authentic rituals, original music and ancient spiritual connections with different parts of the world are the tangible and intangible context of the Sveshtari tomb.

From the only beginning of the investigations there was a plan to create a scientific and cultural center well as an archaeological park.

Projects for protection and preservation were prepared in the process of the excavations for the immediate restoration of every excavated site or groups of tumuli. Protection buildings were constructed over all original archaeological situations. Plan of the park was also made.

With the years the problems of the reservation are becoming more and more serious. , especially after the changes in the economic and cultural policy of the country and the decentralization of the preservation activities which lead to disproportion between the possibilities of the small local communities and the needs of the nationally significant monuments located on their territories. There is not any permanent financial support for the most urgent needs of the reservation , the number of the sponsors who give adequate support like the International center for the study of multicultural relations, the Foundations Future for Bulgaria and Values, is limited - and in more cases the conditions of the sponsors do not correspond to the needs of the monuments.

THE STATE OF THE MONUMENTS

With the exception of the Sveshtari tomb which will be soon open for visitors with the support of Headley trust and the assistance of the Bulgarian ICOMOS , the monastery Demir baba, where new wall paintings were discovered during its restoration, and of the tomb under tumulus 13, which is in good condition, only an experimental conservation of a fragment of the wall of the Thracian town was made in 1999.

The enbankment of the tomb below tumulus 12 is in process of deterioration, the protection building of the highest tumulus in NE Bulgaria – the Big Sveshtari tumulus is missing, which can result in the destruction of the tomb before its investigation is finished and the eventual reconstruction done and all protection buildings over the other types of tumuli have been destroyed. Fig. 9. The only thoroughly studied unique Thracian sanctuaries and cult places remain in ruins. More than 20 tumuli have been destroyed in the area of the reservation.

The speed of the destruction is much greater than this of the possibility to find financial support for any of the activities.

HERITAGE AND SOCIETY

The site is of great importance for the local population-a bearer of its intangible values and guarantee for their authenticity. The percentage of the unemployed among this multiethnic

population is one of the highest in the country. The team tried to show that the scientific and cultural activities in the reservation can be socially significant and involve more actively the local population in the heritage protection and conservation. In the frame of the Government Program for the unemployed temporary jobs were available at the excavations and for maintaining the reservation for several seasons. The process of reintegration of the population and its interest in the protection of the site were evident.

The lack of financial support since last year in the frames of this Government program was another heavy blow on the reservation.

Scientific collaboration with the different institutes of the academies of Sciences in Italy and France, excavations with specialists from Russia and Holland, summer schools for Bulgarian and foreign students. participation of children from art schools to work on their courses of painting and music and of YMCA volunteers, aim to develop the reservation as a scientific, cultural and educational center and at the same time create public sense of responsibility to the preservation of the heritage of the reservation. Several exhibitions in Bulgaria and one in France played a role for the popularization of the site, but this significant heritage remains unknown for the public.

Publications for the series Sboryanovo and Helis and catalogues ready for print remain unpublished .

THE POSSIBLE PROSPECTS OF SBORYANOVO

The discoveries in Sboryanovo and its significance as a sacred area, the urgent need to provide some rescue excavations, the traditions in approaching the study and preservation of its cultural heritage by new methods have confirmed both the significance of its heritage as well as its importance as a scientific and cultural center. Sboryanovo should be preserved and developed. The inclusion of the whole cultural context of the Sveshtari tomb on the UNESCO World heritage list and the creation of an international archaeological center for collaboration in the field of elaboration of new methods of excavation, conservation and preservation with the support of all interested countries, following the best examples of the world experience, could create a new type of favorable social and economic conditions for the preservation of its cultural heritage in this new and period.

Both the archaeological and the spiritual heritage of the reservation are in danger and Sboryanovo needs strong international support..

Main publications

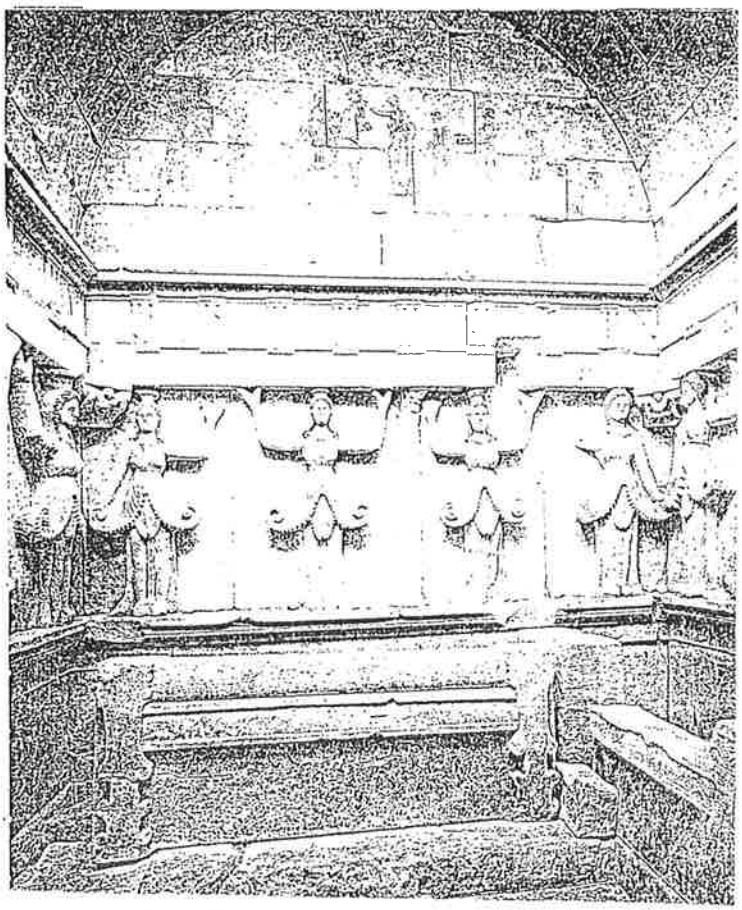
1. Fol A, M.Chichikova, T, Ivanov. The Thracian tomb near the village of veshtari.Svjat,1985

2.Sboryanovo-Studies and Prospects. Proceedings of the Conference in Isperih, 8 December 1988. Helis II. Ed by D.Gergova, T.Stoyanov

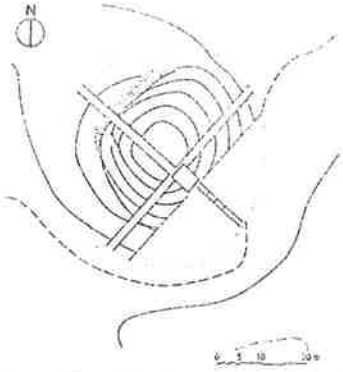
3.International Conference "Geoarchaeology of Tumuli"in Ancient Europe. Cosenza ,1993, PACT –in print

4. Sboranovo, vol. 1, 2.

1.Preliminary map of the reservation
I The sanctuary at Kamen rid
IV. The Hellenistic town

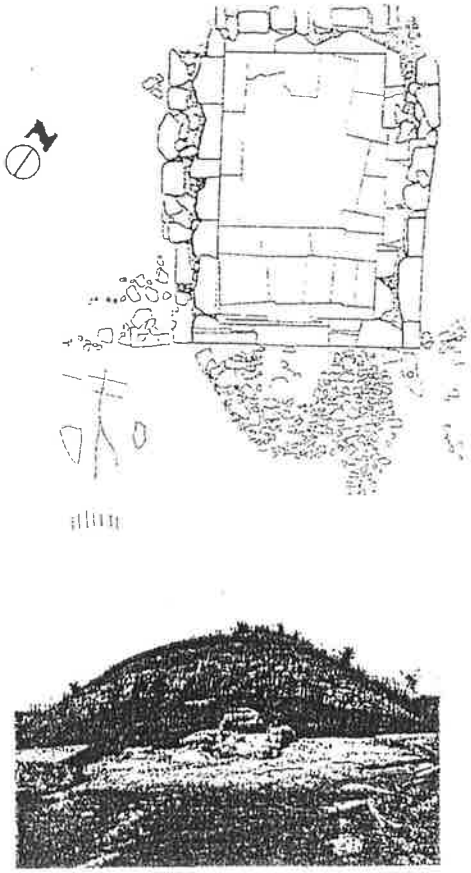


2.The main chamber of the Sveshtari tomb

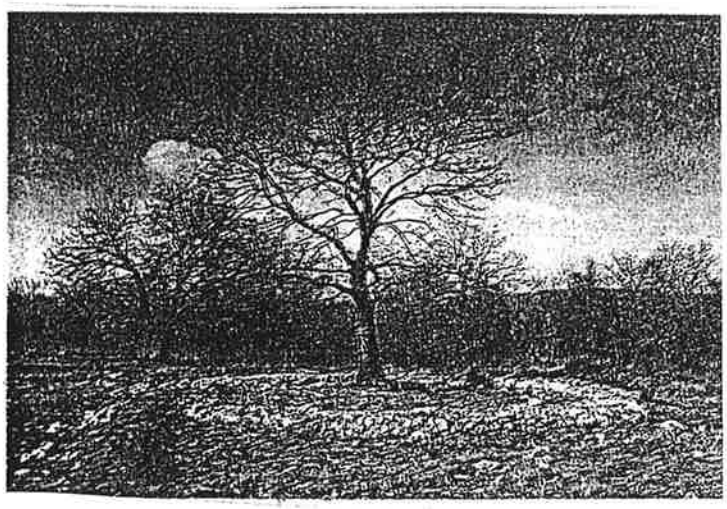


3.The profiles of the tumulus 13 after the geophysical localization of the tomb

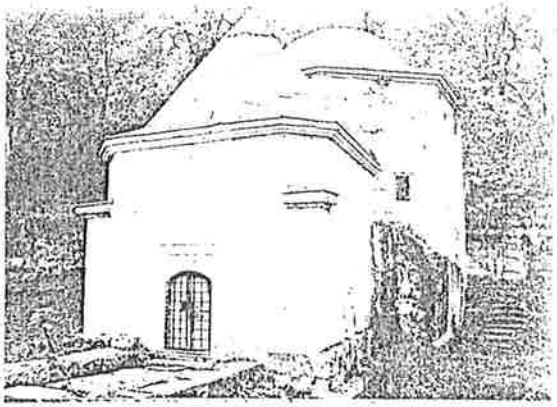
4. The tomb under tumulus 13



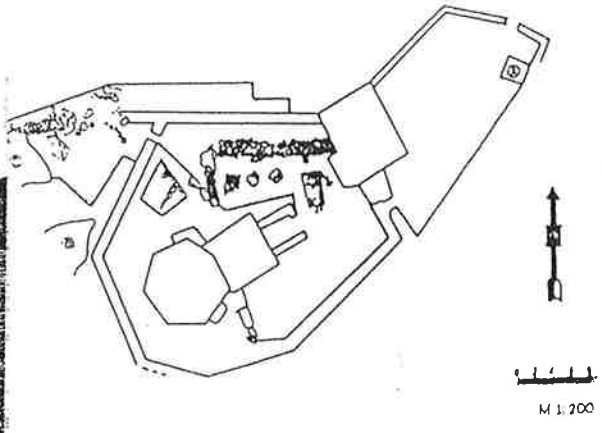
5. The tumulus 12 before the construction of the protection building and its plan with signs



7. The sanctuary at Kamen rid. Stone circle

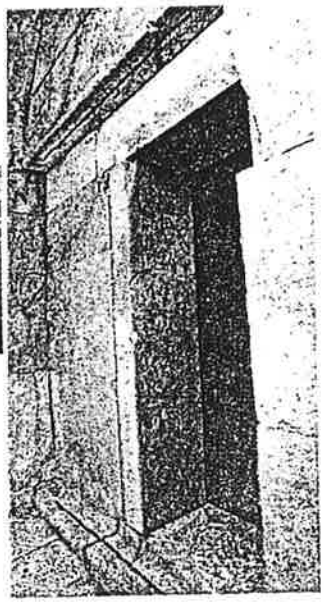


8.The Hellenistic town

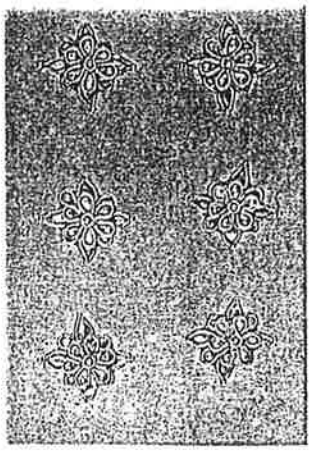


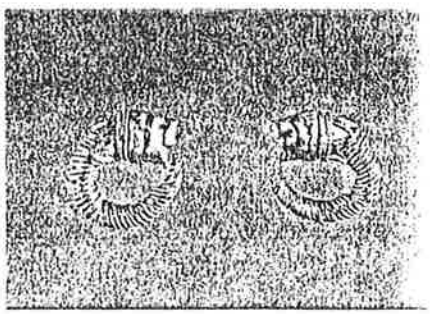
6.Plan of Demir Baba teke with the Thracian adyton to the North of it.

9. The Big Sveshtari tumulus



11 Ornament on the stone fence of Demir baba teke





10 Golden and silver objects from Sboryanovo

1. The tomb under tumulus 13 entrance from inside.

ベトナム民家の建築的特徴について（中間報告）

山田　幸正

はじめに

昭和女子大学国際文化研究所を中心とした研究チームは、1997 年夏以来、ベトナムの文化情報省はじめ各地の建築大学等と共同して、全国に遺こる伝統的民家の実態調査を進めている。97～98 年度を第一期調査として、バクニン省（調査総数 775 件）、トゥアティエン・フエ省（690 件）、ドンナイ省（400 件）において実施され、さらに 99 年度からは３カ年計画で第２期調査を推進している。すでにこれまでにナムディン省（300 件）とゲアン省（379 件）の調査を完了し、本年度はクアンガイ省とティエンザン省で進行中である。この調査の目的は、全国を対象として、できる限りくまなく伝統的な木造民家をリストアップし、そのなかから文化財指定すべき優れた民家（各省５件程度）を選定することにある。さらに、そのなかで若干の民家については、日本からの技術指導により、本格的な文化財修理が実施されることも前提にしている。

また、長らく継続されてきた国際協力事業「ホイアン町並み保存プロジェクト」も、ホイアンがユネスコ世界遺産に登録され、一定の目途をつける段階になったことを受けて、本年３月 21 日から２日間にわたり、ハノイにあるホーチミン博物館を会場に、「ベトナム木造建築文化財保存越日シンポジウム」が開催された（写真）。日本とベトナムの文化財関係者が多数参加し、ホイアンの今後の保存体制のあり方やベトナムにおける民家研究の現状と展望などについて、実に熱心な討論が展開された。なお、シンポジウムの冒頭、ベトナム文化情報省より、我が国文化庁、昭和女子大学、日本建築セミナーに対して、感謝状と記念メダルが授与された。

ここでは、第一期調査より、つまり北部・中部・南部ベトナムを代表する３省における調査から、その成果を概観しながら、それぞれの民家にみられる建築的特徴について報告したい。

１．北部（バクニン省）の民家

屋敷構え　主屋・付属屋・台所・豚小屋・便所・風呂など、ぞれぞれが別棟で建てられる。また、屋敷を構成する家屋それ自体や煉瓦造の壁、あるいは低木などで敷地を囲い込んでいる。また、集落内の道路に面して開く各戸の門は、主屋の正面を避けられるのが普通である。

付属屋は主屋の右側か左側に L 字形に配置される場合が多く、門寄りに豚小屋や台所を設けるのが一般的である。主屋の前に配された矩形をした磚敷きの庭は主に農産物などの干すなど、農作業用のものである。大規模な敷地の場合、敷地内に池を造り、十分に植栽・作庭された例も見られた。敷地内に井戸がある例が多く、それをもたない場合でも煉瓦造の水槽が設けられている。それほか、台所の近く、あるいは植栽された庭には台所の神様または土地の神様を祭った小さな祭壇が設けられている例があった。

主屋の平面　主屋の内部空間は、中央間口 3 間の両端に板壁をたてて「主室」と「側室」とに仕切られている。

「ベトナム木造建築文化財保存越日シンポジウム」　会場内風景（ハノイ　3/21-3/22）

主室中央奥には先祖を祀る壇が備わり、しばしば豊かな彫刻を施した枠取りや漢字で書かれた額などで飾られている。その左右の柱間には、我が国の縁台に似た、ベットよりひとまわり大きな矩形の台が置かれ、主人が客を迎える応接空間となったり、日常的な茶の間ともなる。その奥に主人の寝台が置かれることが多い。左右の側室は通常、農産物や食品などの倉庫、婦人や子供などの寝室、予備室として使われている。

主屋は、間口３間・奥行３間が基本的な平面形式と考えられる。ただし、このような３間家屋はまれで、建物前面にはヒエンを付加して奥行４間とし、左右にそれぞれ側室を設けて間口５間とする家屋が一般的である。間口を７間とする大規模な例もある。家屋は数十 cm の基壇の上にたち、磚敷きあるいはたたき土間である。柱にはすべて円柱断面をした木材が用いられ、礎石の上にたつものが多い。建物中央にたつ４本の柱（「正柱」と呼ぶ）の周囲に、より細い柱（「側柱」と呼ぶ）がたち、梁間・桁行それぞれ３間の空間が形成される。さらに建物前面には通常、吹き放しの空間となるヒエンが付加され、そのための柱（「ヒエン柱」と呼ぶ）が並ぶ。建物の前面中央３間は開口部となり、その建具は床より約 30cm 上に中敷居を用いるものが多く、枠内に桟戸か板戸などの開き扉を納めている。建物の背面や側面では柱から離れた位置で煉瓦壁が取り囲んでいる。それらの壁は屋根の両妻で段状に立ち上がり、正面両脇で突出して、装飾的に扱われる例が多い。

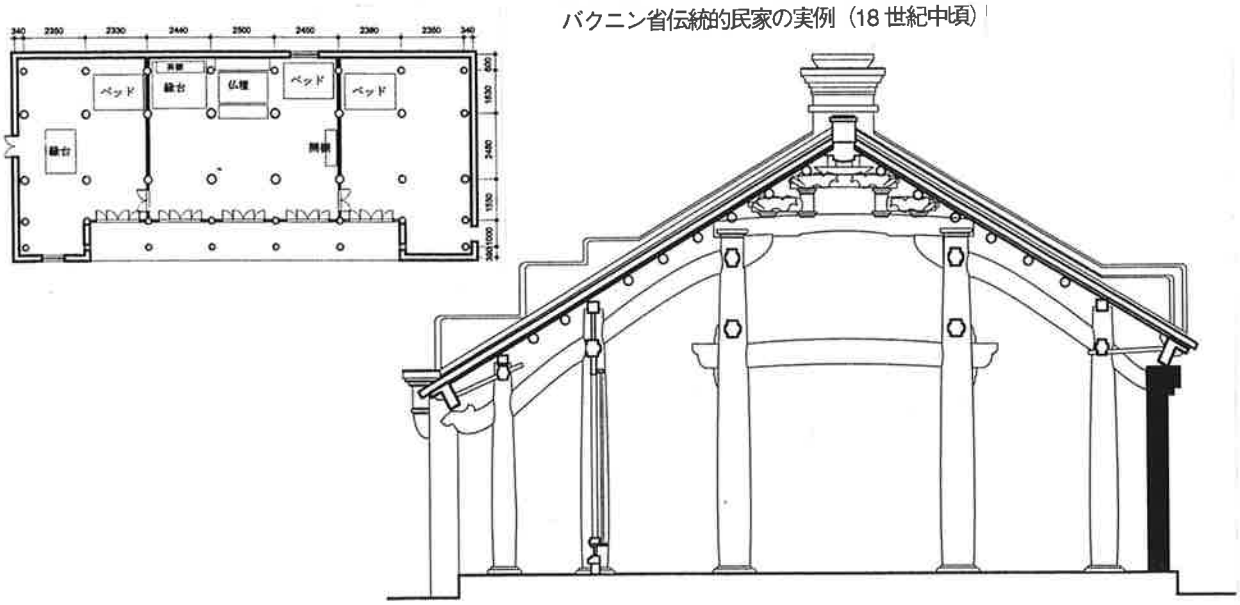
主屋の架構　主屋は通常、奥行（梁間）方向に４間で、中央に正柱２本、その前後に側柱、その前面にヒエン柱が立つ。正柱の上端近くで梁間方向に横架材（「小屋梁」と呼ぶ）が渡り、正柱同士を繋いでいる。ここではこれより上部を「小屋組」とし、それより下部を「軸組」として区別する。梁間方向の軸組をみると、側柱はその上端付近を通る横架材（「飛貫」と呼ぶ）によって正柱と繋がっている。全体に彎曲した斜梁が小屋梁の下から正柱を抜け飛貫上部までのび、さらに飛貫から側柱およびヒエン柱を通過して軒を支えている。主屋の正柱を含む中央柱間における奥行方向の軸組架構を、とくに飛貫に着目して整理すると、５つの類型に大別される。桁行方向でも各柱の上端をつなぐ頭貫のほか、飛貫よりやや上の位置に貫が渡り、各部を連結している。

小屋組内は斗状の部材を介した２～３段に渡された横木、あるいは束からの挿肘木、海老状の斜梁、絵様を施した板状の部材などによって構成される。斜梁の上に幕板を嵌め、斜梁上部にできた曲線的な空隙を埋めて、そこに母屋を載せる。母屋には丸い材を用いる例と角材を用いる例とがある。母屋上に板状の垂木が約 10cm ほど間隔で並べられ、その上に直接瓦が敷き詰められる。

２．中部（トゥアティエン・フエ省）の民家

屋敷構え　敷地境界は生垣や樹木で囲われ、門はオモヤの正面に配されることが多いが、門とオモヤ前庭の間にはビンフォンと呼ばれる屏風のような小さな壁か、あるいは水盤が設置される。オモヤの横や後ろ側に畑があり、大規模な敷地では魚を飼う池を造り、祖先の墓を祀るものもみられる。敷地内に井戸を持つ例が多い。前庭隅には屋敷神を祀ると思われる小さな祠が設置される。

バクニン省伝統的民家の実例（18 世紀中頃）



建物配置　フエの民家はオモヤ、ハシヤ、ヨコヤなどからなる分棟型である。オモヤ・ハシヤ・ヨコヤの３棟は原則的に、同じ基壇上に建てられている。その他の付属屋として釜屋、便所、行水所、家畜小屋などがある。

オモヤの平面　オモヤ平面は身舎に庇を１～２重めぐらせるものであり、身舎の規模によって「ロイ」、「ルオン」とよばれる２つの形式に分かれる。身舎が間口１間×奥行１間のものをロイ、３間×１間のものをルオンという。両形式とも庇が２重にめぐるものが最も多く、全体としてロイ形式は５間×５間、ルオン形式なら５間×７間となるものが一般的であろう。庇が２重めぐり、正面のみ庇がさらに１重付加されるものもある。また、前後は庇が２重、左右は庇が１重というロイ形式やルオン形式もみられた。

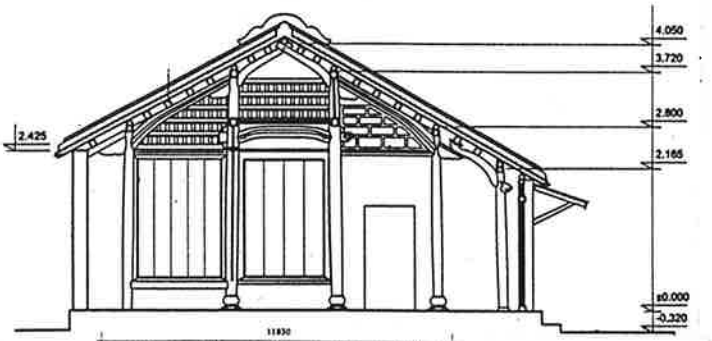
オモヤの架構　ここでは身舎部分の柱を「正柱」、その周りをめぐる１重目の庇柱を「第１側柱」、２重目の庇柱を「第２側柱」、ヒエン（列柱の立つ前面開放の空間）の柱を「ヒエン柱」と便宜上呼ぶことにする。まず前方正柱と後方正柱を貫状の梁で連結して立ち上げる。間口方向は頭貫と飛貫で連結する。飛貫の先端は栓で固定される。貫状の梁の上に蟇股・束を立てるものが氏族の廟などにみられる。この束は棟木まで到達せず、合掌の途中を連結させるものであり、構造的に「棟持ち」とはなっていない。 次に第 1 側柱を立ち上げ、斜梁で奥行方向を繋ぐ。斜梁は正柱から第１側柱まで架かるものと、柱間ごとに１本ずつ架かるものがある。斜梁の合掌部分は栓で止めて棟木を受ける。第２側柱に軸吊の板戸が入らず、少し外側に細い柱を立て、ここに板戸を入れるものもある。柱は内側に少し転んでいる例がみられ、正柱間の下端部と梁下部とで比べると、２～３cm ほど上が狭くなっている。

ヨコヤなど　ヨコヤの屋根は切妻が一般的で瓦や茅で葺かれる。オモヤの右側に直交に配されるものが多い。オモヤとヨコヤはつながっているものと、ハシヤで繋がれているものとがある。ハシヤの屋根は切妻や入母屋で瓦葺きある。ヨコヤは日常の居住空間であるため、建て替えられている例が多い。伝統的なヨコヤでも生活しやすいよう柱の省略が多くみられる。

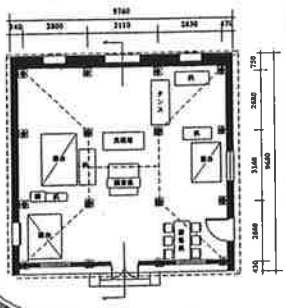
３．南部（ドンナイ省）の民家

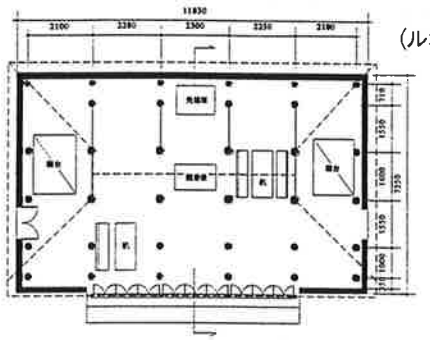
屋敷構え　敷地は建物や塀などで囲まれていることは少なく、低い生垣などで曖昧に仕切られているのが一般的である。ビエンホア市内およびその近郊の集村で煉瓦壁で明確に仕切られているのは例外的といえよう。行水所、便所、家畜小屋などの付属屋は主屋の周囲に適宜、配置されており、明確な規則性は見い出しにくく、また、主屋へのアプローチにも規則性はみとめられない。

主屋構成　カミヤ、ナカヤ、シモヤ と呼ばれる建物からなる分棟型である。カミヤのみからなる１棟型、カミヤ・シモヤの２棟型、カミヤ・ナカヤ・シモヤの３棟型があるが、一般的な形式は２棟型である。カミヤとシモヤは同一基壇上にあり（シモヤは土間であることが多い）左右もしくは前後に並列している。カミヤ・シモヤが接する谷には大きな樋を設け雨水を処理している。それぞれの建物は名称が示すように一種の序列関係がある。最上位のカミヤは家屋の中央に桁行３間・奥行１間の仏壇をまつる空間を持ち、この空間を境に前後で仕切られ

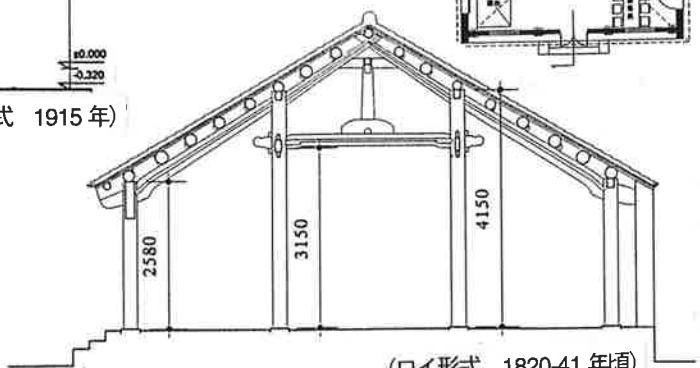


フエ省伝統的民家の実例





（ルオン形式　1915 年）



（ロイ形式　1820-41 年頃）

ている。前室は主に主人の接客間として、後室は寝室・物置として使用されている。ナカヤを有するもの、つまり３棟型の民家は当然のこと、規模の大きな実例が多い。その場合、ナカヤも接客などに使われるが、カミヤはより神聖な空間としての祖祀堂となる。シモヤは主に日常生活の空間で台所・食堂として使われる。カミヤ・シモヤの繋がりは強く、カミヤの後室・前室両方から出入りできる。また、カミヤ・シモヤを共有して主屋前面には、ヒエンと呼ばれる柱間１間幅の空間がつくのが一般的である。ヒエンは建物前面だけの例、左右にも持つ例、家屋の四周を取り囲むように付く例がある。

主屋の平面　通例カミヤは間口５間・奥行６間で、前面もしくは前後に奥行１間のヒエンがつく。内部中央 3 間×1 間に仏壇を祀り、その前後で空間を分けている。仏壇正面の空間が最上位と考えられ、テーブルや縁台を置き、接客など主人用の空間として使われる。仏壇背後とその両脇のコの字型の空間には寝床を置くほか、物置としても使われる。一部に両脇を寝室として仕切る例も見られる。シモヤにはかまどなどが備わり、台所、食事室、内向きの居間として使われる。２棟が並列する形式において、シモヤはカミヤの前後両方の空間に通じているだけでなく、正面の吹き放しの空間(ヒエン)によっても連絡している。

主屋の架構　基壇は 10cm ほどで、柱は断面が円形で胴張りをもち、礎石の上に立っている。奥行方向にみて、建物中央の正柱の列を第１柱列、次いでその外側を第２柱列と呼ぶ。各柱間は奥行方向に斜梁で繋ぎ（シモヤでは柱間２間を繋ぐものもある)、それらは棟木位置で連結される。斜梁はその下端部で下方にある斜梁の上端部を支持している。最下方の斜梁先端部などには木彫装飾が見られ、家屋の正面性を高めている。

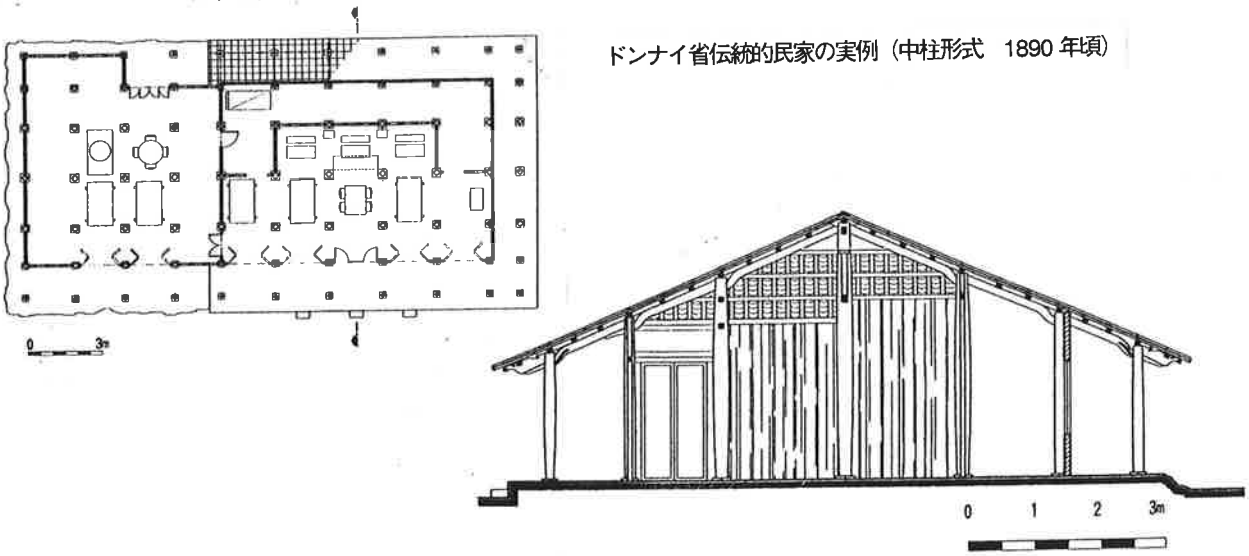
第１柱列にたつ柱、つまり正柱とその架構に２つの形式がみられた。正柱が棟木の直下になく、２本の正柱を結ぶ梁状の貫を介して棟木の下にに束をたてるものと、棟木の直下に正柱のたつものである。観察した実例からすると、この２つの形式はほぼ同じ割合で現存しているようである。

おわりに

本報はわずか３省のみの実態調査から報告したもので、ベトナム民家の建築的全容が明らかになったわけではないが、少なくともいくつかの注目すべき建築的特徴がしだいに浮かび上がってきていると考えられる。

まずは、斜梁を用いた架構形式である。中国の建築技法に強く影響を受けていると思われるベトナムの木造架構技術にあって、おそらくベトナム独自に発展させた架構形式であろう。次に斜梁とも関連するが、棟木を支える技法である。南部地域にみられる棟木直下の中柱を用いるもの、中部などで見られたり見られなかったりする束立てするものなどである。ほかにも、先祖壇・仏壇を中心にした部屋の区分・ハレとケの観念、また、ヨコヤ、シモヤ、カマヤなど付属屋や前庭など屋敷・家屋構成、中部の一部で確認された床の存在、中敷居を用いた板扉などの建具、木彫などの装飾の技法や用法、さらには各部材の呼称などの歴史的な経緯や用法などである。

これらいずれも容易に解明される問題ではないが、今後もこの民家調査が順調にベトナム全国に進展し、また一部の興味深い実例について修復保存の手がおよべば、その道もおのずと開けてくると信じている。



ドンナイ省伝統的民家の実例（中柱形式　1890 年頃）

JICA 開発パートナー事業

「ベトナム木造民家文化財保存プロジェクト」

昭和女子大学国際文化研究所　教授　　友田　博通
同　　上　　講師　マークチャン
[日本建築]セミナー　　事務局長　増田千次郎

1．ホイアン町並み保存プロジェクトの現況

1992 年 9 月初めてホイアンの町並み保存に協力を開始して、早くも 8 年が経過した。ホイアンは 1999 年 12 月にユネスコ世界文化遺産に登録され、観光客も年間で、2500 人から 20 万人を超えるまでになった。当初は、外国が資金を提供しなければほとんど工事は発生しなかったが、現在はいたるところで工事が見られるようになった。この間、屋根替え工事約 40 件、家屋修復 7 件、貿易陶磁博物館・日本人墓修復への協力、町並み保存条例、町並み賞など市行政への提言など、様々な形で協力してきたが、現在は住民の自力工事をいかに誘導するかが最大の課題である。このため、本年 3 月から JICA 長期派遣専門家がホイアンに常駐し、確認申請のチェックをする形での町並み誘導に協力することになった。

これらのプロジェクト推進には、資金的な苦労が伴なった。調査は各種の研究助成金を確保することができたが、修復費の確保には困難を極めた。私学振興財団に受配者指定寄付金の申請を行い日本側の寄付受け入れ組織を昭和女子大学に設置、同時に、ベトナム側にも、ホイアンソサエティという政府認可の寄付受け入れ組織を設立していただいた。同時に、ホイアンソサエティは、グエンティビン副大統領を名誉会長に文化情報省・カンナムダナン省・ホイアン市・住民が参加する組織で、ベトナム側の総意を取り付けるに相応しい組織ともなった。また、JICA 派遣専門家については、通常は文化財保存には非常に対応しにくいようだが、幸いホイアンについては「JICA ヴィエトナム中部重点地域総合社会経済開発計画調査」で観光推進地区に取り上げられ、この観光資源確保を目的として採用いただいた経緯がある。

2．ベトナム全国への対象拡大

私達の活動の目的は技術移転であり、調査研究上はハノイ建築大学・建設省建築研究所と、修復技術は文化財保存修復設計センター・ホイアン市遺跡保存事務所と、町並み保存行政はホイアン市と、共同作業とした。その成果は着々と上がり、調査研究上は既に主体を移管、修復技術もホイアン市は十分とはいえないが設計センターには移管できる体制もできた。一方、ベトナム文化情報省としては 2 国間協力がホイアンに集中することを嫌い、ベトナム全国を対象として欲しいという希望があった。また、そもそも研究助成金の研究期間は最大 3 年とされ、3 年ごとに新たなテーマを設定せざるをえない。そのため、1997 年度から「ベトナム全国民家保存調査」(年

写真－1　ホイアンでのセミナー

2省、各省 400～800 軒)にテーマを変更し、研究はホイアンから全国を対象とするようになった。この詳細については、これを担当している山田幸正都立大助教授が報告する。

この調査のコーディネートを担当するベトナム文化情報省は、当然ながら家屋修復技術の移転を期待し、各省5件の民家を重要文化財指定し、1件を日本隊の指導で家屋修復し、文化財修復技術の移転へと繋げるよう強い希望を持っていた。この要望に応えるべくホイアンソサエティの役割拡大を打診したが、政府認可がホイアンに限定されており不可能とのことで、新たな政府認可組織を作ることもままならず、ベトナム側には伝えなかったが民間同士の寄付授受による修復協力はできないと判断していた。

3.「JICA 開発パートナー」事業の募集

平成 11 年度より、国際協力事業にたずさわる我が国の NGO、地方自治体、大学などと JICA とが、互いの経験とノウハウを活かしながら開発途上国の開発に寄与することを目指した「開発パートナー事業」が開始された。この事業は NGO など国際協力にたずさわっている団体から、プロジェクトの企画について提案を受け付け、JICA 事業として採択するもので、選考された団体は、JICA との委託契約に基づき、プロジェクトを実施するというものである。なお、事業は、日本政府と先方政府との間の政府開発援助（ODA）事業の実施にかかる国際約束に基づき、JICA 事業として実施するもので、事業の監理や成果に関する最終的な責任は JICA にあり、外務省等が実施している補助金事業とは異なる。

開発パートナー事業の特色として、JICA は以下の4点をあげている。

① 日本の NGO、大学、地方自治体等からのアイデア募集

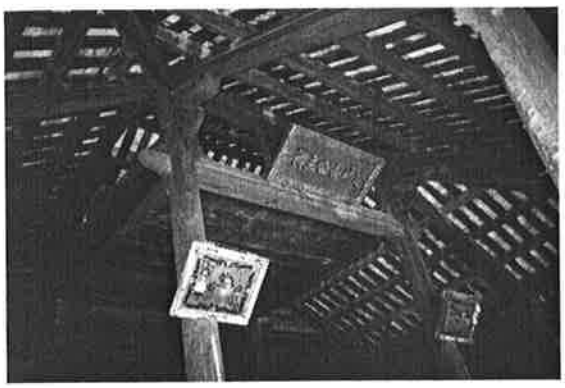
→多彩かつ草の根レベルに届く国際協力の実施

② JICA と団体間での委託契約に基づくプロジ

写真－2　バクニン省修復農家外観

写真－3　同上　調査風景

写真－4　フエ省修復大官の家外観



写真－5　同上　内部の状況

ェクト実施
→互いのノウハウと経験の融合
③３年以内でのプロジェクト実施が可能
→成果を重視した協力の実現
④管理費を含む必要な経費の支給
→受託団体の実施体制強化
また、対象地域は以下の通り。
アジア地域：インド、インドネシア、ヴィエトナム、カンボディア、タイ、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ミャンマー、モンゴル、ラオス、スリランカ
中南米地域　：アルゼンティン、ドミニカ共和国、パナマ、パラグァイ、ホンデュラス、ボリヴィア、メキシコ
大洋州地域　：パプア・ニューギニア、フィジー
中東地域　　：ジョルダン、トルコ
アフリカ地域：ガーナ、ケニア、タンザニア、ザンビア、ジンバブエ、南アフリカ

写真－６　ドンナイ省修復大官の家外観

写真－７　同上　内部の状況

４．「JICA 開発パートナー」事業への応募

この事業の公募に応募するよう JICA より私達のところへも案内はきていたが、申請書類の膨大さ・文化財修復事業といった分野がないこと、また、私達の側で全国家屋修復をあきらめていたこともあって応募を放棄していた。そんな折、ホイアン町並み保存プロジェクトの企画者でありプロモーターでもある東京国立文化財研究所・斎藤英俊・文化財保存修復国際協力センター長より強いご指示があって、1999 年 10 月、第一回の公募に「ベトナム全国木造民家文化財保存プロジェクト」で応募した。

このプロジェクトは 12 月に採択された。審査過程では、事業推進にあたっての成功可能性の高さ（熟度）が重視されたようで、JICA 現地事務所の評価も大きな採点項目になった。その意味では、ホイアン町並み保存プロジェクトに JICA の長期専門家派遣を受けており、JICA 現地事務所が私達の活動を把握していただいたことも有利に作用したと推測される。

６．「ベトナム全国木造民家文化財保存プロジェクト」の概要

申請の概要は、JICA への関心表明に簡潔に述べたので以下に示す

ベトナムの伝統住居は、最近の経済発展の影響で消滅の危機に瀕す。1997～2001 年まで文部省科学研究費で実施中の民家調査により再発見再整理しつつあるベトナムの多数の伝統的木造民家を、消失しないうちにベトナム側が独自で修復保存する体制作りあげることが望まれる。大学では、調査研究費は得られても修復技術移転のために実際に修復工事を起こしこれに資金的援助する資金、技術支援のための資金は得られない。

現在、5省の調査が完了、2001年までに11省の調査が完了する。文化情報省は各省5件の重要文化財指定と1件の日本援助による文化財修復を要請。11省でこれが実施できれば、後はベトナム側が独力で保存修復を実施いていくことができると期待している。その結果、ベトナムでは多くの戦禍にもかかわらず多数の民家文化財を後世に伝えることができよう。

実施の概要は、毎年2～3省で重要文化財民家の修復工事に対する資金援助と修復設計・常駐監理、及びベトナム側技術者への教育プログラム。具体的には、バクニン省農家、フエ省大官の家、ドンナイ省大官の家、ナムディン省豪農の家、ゲアン省ホーチミンゆかりの農村集落等について実施し、修復工事の適当な段階で、シンポジウム・セミナー等を開催し文化財保存修復に関する技術移転をはかる。

このような申請に対し、年2省3ヵ年の合計6件が採択された。

6．JICAミッションとして相手国政府関係機関と協議

採択に際し、事業の熟度が大きな審査基準になった理由はすぐに分かる。昨年12月に採択された後、年度内にミッションを派遣し2国間の国際約束を成立させてから、今年実施という強行スケジュールが待ち受けていたからである。

本年3月、前JICAハノイ事務所長を団長に、私達もミッションの一員として相手国政府関係機関と打合せに参加した。現地日本大使館・JICA現地事務所・ODA担当の計画投資省・実施担当の文化情報省は事前挨拶と打合せ結果の報告、実施サイトの自治体・修復希望民家などへも実施上の問題点と契約金額算定のための訪問を行う。

その内容は、ホイアンでのホイアンソサエティとの折衝部分をベトナム政府そのものにしてJICAが担当し、2国間の国際約束の取り決めを周知確認する作業が中心であった。政府間の交渉のたいへんさを初めて知らされ、あらためてホイアンにおけるホイアンソサエティの果たしているグエンディンアン会長の役割の重要さを知らされた。

7．JICA開発パートナー事業と文化財修復

今後の海外での文化財修復協力において、JICA開発パートナー事業がどのような役割を果たすかはまだ未知数だが、少なくとも経済協力を主眼としているJICA事業の中では、観光事業の資源確保など位置付けのもとに、文化財修復協力も比較的採択されやすいスキームであることは間違いない。

私達の居住者のいる民家の修復保存というプロジェクトは、即座に居住者の了解と賛同を得るという事前の互いの信頼関係があって初めて成り立つプロジェクトであり、先に契約があってその後実施対象を検討するという局面になると、今後、積算を含めて多くの困難が予想される。その意味では、これから開発パートナー事業に文化財修復協力で応募される方々にご迷惑をかけないよう、私達も一生懸命努力していきたい。

なお、ホイアン町並み保存プロジェクトに関する展覧会**「世界遺産ホイアン展」**を開催いたします。ベトナムから2棟の家屋を（部分）加工して日本にもってきて展示します。パンフレットを同封いたしますので、是非ご覧いただければ幸いです。

事務局日誌

(2000/6/1-2000/8/31)

2000年

6/5　US/ICOMOS より NEWSLETTER No.2 March-April 2000 を受領。

6/5　「本部経費節減のため ICOMOS NEWSの配布を今後は国内委員会に依頼したい」との提案（財務部長 Giora SOLAR氏書簡、4/28受領）に対して、石井委員長が「本部から各会員に直接郵送することに high symbolic valueがあると思うので、個人的には不賛成。ただし７月末の理事会で審議する予定」との回答を送付。

6/9　ICOMOS/BULGARIA の委員長 Todor KRESTEV氏より石井委員長あてに、日本イコモスとの交流事業に対する謝意と期待を述べた書簡を受領。

6/9　ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所より、本年３月に奈良で開催された「世界遺産国際シンポジウム」－世界遺産保護の重要性について考える－の記録集を受領。

6/14　POLAND/ICOMOS の Andrzej TOMASZEWSKI氏（ICOMOS International Training Committeeの名誉会長）より石井委員長あてに、「９月に日本庭園研究のために訪日する学生（ＣＶおよび各種の紹介状添付）に本中　眞氏（文化庁）の支援を得たい」との依頼状を受領。委員長の意向で本中氏が直接対応。

6/17　US/ICOMOS の Hisashi SUGAYA 氏（Cultural Tourismのpresident)より、同委員会のannual meeting開催日程についての文書を受領。

6/19　昨年10月に大阪で木造建築研究フォラム主催により開催された「大阪国際公開フォラム」－海洋性木造文化の継承・発達と太径長大材の生産供給システムの持続－のCD-ROM（報告書）を、同フォラム事務センターより受領。

6/19　[JAPAN ICOMOS INFORMATION]第４期11号を発行。会員諸氏に送付。

6/23　日本イコモス国内委員会2000年第３回拡大理事会（7/22）の案内を理事・監事・顧問・主査の諸氏に発送。

6/24-7/12 石井　昭委員長は Eger Summer Seminarで講演のため HUNGARYを、また Plovdiv 旧市街保存協力事業に関する予備調査のため BULGARIA を訪問、両国との交流を深められた。

7/3　韓国水原の市長 Sim Jae-DUCK 氏より石井委員長あてに、本年9/4-8 に UNESCO の協力により水原市で開催される国際市長円卓会議 "International Roundtable of Mayors of World Heritage Fortress Cities" の案内を受領。

7/4　US/ICOMOS の Hisashi SUGAYA 氏より、Cultural Tourismの annual meeting が、12/1-4,2000 にギリシャの Lesvos で開催されることになったとの書簡を受領。

7/5　US/ICOMOS より NEWSLETTER No.3 May-June 2000を受領。

7/13　イコモス本部より、新しい E-mail address の通知と、「7/26-29,2000にエクアドルで開催される "Ciudades Civilizadas 11"の情報が web-site (WWW.ecgrupo.net/icomos.htm)にある」との報告を受領。

7/14　韓国水原市より、9/4-8 の会議開催地水原紹介の写真集を受領。

7/17　イコモス会長の Michael PETZET 氏より、7/3-4,2000にミュンヘンで開催された会議で軌道にのった Heritage at Risk(Ｈ＠Ｒ！) project の概要を受領。

7/19　US/ICOMOS Summer Training Courseに参加している森田　守氏より、石井委員長あてに、現地の近況報告の書簡を受領。

7/21　欧州茅葺き視察研修報告書刊行会（代表・日塔和彦氏）より、イギリス・ドイツの茅葺き技術とその保存体制視察研修報告書＜ヨーロッパの茅葺きとその技術＞－THATCHED ROOF AND TECHNIQUE IN EUROPE －を受領（寄贈）。

7/22　日本イコモス国内委員会2000年第３回拡大理事会開催（於学士会館 1:00-4:30）。

7/26　ICOMOS NEWS の配布方法変更に関する本部提案に対して、日本イコモス理事会の正式回答（6/5 の書簡と同趣旨）を委員長から送付。

7/26　文部省の第15回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会（代表・斎藤英俊氏）より、同シンポジウム「世界の文化遺産を護る」（2001/1/27-28於東京・朝日ホール）の企画書と後援依頼書および第14回「大学と科学」シンポジウム（1999年度）

の報告書を受領。

7/27 US/ICOMOS の Hisashi SUGAYA 氏より、新しい E-mail address の通知および本年１２月にギリシャで開催される Cultural Tourism Conferenceと annual meeting への出欠の返信を促す手紙を受領。

8/4 RUSSIA/ICOMOS の委員長 Igor MAKOVETSKI氏より石井委員長あてに、「同国のICOMOS国内委とUNESCO国内委が共同所管する Documentation and Infromation Centerのデータベースを拡充するので、日本イコモスと情報資料の交換をしたい」との申し入れの書簡を受領。

8/4 イコモス本部より、UNESCO,ICOMOS 共催の "MORE THAN TWO THOUSAND YEARS IN TEH HISTORY OF ARCHITECTURE-Safeguarding the Structures of Our Architectural Heritage" (10/16-19,2000 於ベツレヘム) のプログラムを受領。

8/7 現在日本イコモスが関わっている15の国際専門分科委員会の中で、事務局が今年次の活動状況を把握していない委員会(Photogrammetry ・Cultural Corridors・Structures・Historic Gardens and Sites・Stone)の各 voting memberに、情報提供の協力を依頼する手紙を送付。

8/7 イコモス会長 Michael PETZET 氏よりの、＜Heritage at Risk＞についての原稿依頼に、本部執行委員の西村幸夫氏が応じられ、原稿を本部に送付された。

8/9 ICCROMより、6/8-7/6,2000にパリで開催される "Sharing Conservation Science" —International Pilot Course on the Design and Implementation of Scientific Research Program in Conservation of Cultural Heritageの案内を受領。

8/11 イコモス本部より、本年秋にパリで開催されるイコモス執行・諮問の各委員会の開催日が、変更になったこと (11/11-14→11/9-12)と、日程表を受領。

8/11 AUSTRALIA/ICOMOSより、Historic Environment-volumes 1-14 [INDEX] ＜Special Edition June 2000 ＞を受領。内容は、① Author/title index ② Subject index ③ Book reviews ④ Exhibition reviews (以上計34ページ)。

8/11 ICOMOS-IFLA より Bulletine/Newsletter 1999を受領。

8/15 8/4 に RUSSIA/ICOMOSより受領した情報交換依頼の書簡に応えて JAPAN ICOMOS INFORMATION 誌のバックナンバー等を郵送。別途、石井委員長が返信を送付。

8/16 イコモス本部の Jean L.LUXEN 氏 (secretary general)より、7/6-7 に北京で開催された "Cultural Heritage Management, Urban Rehabilitation: Challenges and Opportunities" (UNESCO・中国政府・世界銀行共催) のレポートおよび LUXEN氏の講演要旨を受領。

8/21 US/ICOMOS の Gustavo F.ARAOZ氏より、「国際イコモスおよび各国内委員会が発行している定期刊行物のリストを作って US/ICOMOSの会員に紹介し、定期購読の希望者を募りたいので、日本イコモスの刊行物について知らせてほしい」との書簡を受領。また、US/ICOMOS の役員名簿と、各国際専門分科委員会のvoting member 名簿も同時に受領。

8/30 Training国際専門分科委員会の secretary generalである Joseph KING氏より、日本イコモスが同委員会に voting(稲葉信子氏) と associate (工楽善通氏) member を登録した事への謝辞と、2001年 2月に general meetingの開催を予定しているとの書簡および同委員会の名簿を受領。

8/30 イコモス本部より、本年11/16-18にトルコのイスタンブールで開催される (トルコ文化庁・UNESCO・ICOMOS共催) "EARTHQUAKE-SAFE: Lesson to be Learned From Traditional Construction" のプログラム等を受領。

8/30 ICOMOS/MEXICO より、第10回文化財保存国際会議 "LA CONSERVACION DEL PATRIMONIO MONUMENTAL AL INICIO DEL TERCER MILENIO"を 10/18-22,2000にメキシコのCAMPELCHE CAMPで開催するとの通知とプログラムを受領。

日本イコモス国内委員会　研究会「近現代建築の保存について考える一第５回」

「近現代建築保存における国際NGOの役割と可能性」（仮題）

一昨年から継続して実施しております標記の研究会も、今回で最終回となります。シリーズを締めくくるにあたって、このほどドコモモ日本支部の代表に就任された鈴木博之氏に講演をお願いいたしました。お誘い合わせのうえ、奮ってご参加ください。

日　時：２０００年１１月２５日（土）　午後１時半より
会　場：ＪＩＡ会館（日本建築家協会）　３階セミナールーム
東京都渋谷区神宮前2-3-18　　電話：03-3408-7125
参加費：１０００円（会場費・資料代／学生は無料）

（事業担当：田原）

第２３回全国町並みゼミ日南大会

全国町並み保存連盟による標記大会が本年10月に宮崎県日南市で開催されます。日本イコモス国内委員会も後援団体の一つとして加わります。

開催期間：２０００年１０月６日（金）～１０月８日（日）
開催場所：日南市文化センターほか

詳細については、下記まで直接お問い合わせ下さい。

＜ゼミの参加申し込みについて＞第２３回全国町並みゼミ日南大会実行委員会事務局
〒887-8585　宮崎県日南市中央通1-1-1　日南市教育委員会社会教育課内
電話：0987-31-1145　　FAX：0987-24-0987
＜全国町並み保存連盟・各地からの報告・決議文について＞全国町並み保存連盟　事務局
〒105-0003　東京都港区西新橋２－８－14　宝栄西新橋ビル201
電話：03-3595-0731　　FAX：03-3595-0741

（広報担当：山田）

文化財の保存と修復「伝統に生かすハイテク技術」

文化財保存修復学会の主催による標記後援会が、下記の通り、開催されます。

日　時：２０００年１０月７日（土）午前10時より
会　場：朝日生命ホール（東京・新宿）
講　演：西川杏太郎「文化財の保存修復における伝統技術とハイテク技術」
岡　岩太郎「ハイテクでよみがえる伝統材料と技術--紙と絹」
園田　直子「名画に隠された秘密を探る--油絵の修復とハイテク技術」
三浦　定俊「国宝日光東照宮陽明門彩色の秘密--見えないものを見る画像処理」
今津　節生「巨大古墳に眠る失われた伝統--大和古墳群出土遺跡の科学調査」
今西　良男「国宝唐招提寺金堂の修理--伝統技法と構造解析」
宮本長次郎「出雲大社の謎--よみがえる古代の大建築」
問合せ先：（株）クバブロ内「文化財の保存と修復」事務局
〒102-0072　東京都千代田区飯田橋4-6-5　TH第四ビル４階
電話：03-3238-1689　　FAX：03-3238-1837
E-mail: webmaster@kuba.co.jp　http://www.kuba.co.jp

（広報担当：山田）

第８回　国際文化財保存修復研究会

東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センターの主催で標記の研究会が、下記の通り、開催されます。

日　　時：２０００年１１月２１日（火）１０時３０分より

会　　場：東京国立文化財研究所・セミナー室
内　　容：野口英雄「バングラデシュ・パハルプール僧院遺跡およびバゲラート都市遺跡の保存修復」
矢野和之・友田正彦「中国・大明宮含元殿の保存修復」
三宅理一「ルーマニア・ポルボタ修道院の保存修復」

本研究会の参加は登録制になっておりますので、ご関心のある方は下記までお問合せください。

問合せ先：東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター　環境解析研究指導室
電話：03-3823-4876　/　FAX：03-3823-4867
E-mail：kokusen@tobunken.go.jp

（西浦　忠輝）

文化財保護法50年記念国際シンポジウム「文化の多様性と文化遺産」

文化庁・東京国立文化財研究所の主催で標記の国際シンポジウムが、下記の通り、開催されます。

開催日：２０００年１２月１８日（月）～２１日（木）
会　場：東京国立博物館（平成館）講堂
プログラム：

12/18　基調講演：フェデリコ・マイヨール「文化の多様性と文化遺産」
基調講演：石井　米雄「民族のアイデンティティーとしての文化遺産」
12/19　セッション１：多様な文化と文化遺産
セッション２：多様性への理解、尊重、共有
パネルディスカッション１：「文化の多様性と文化遺産の役割」
12/20　セッション３：多様性を脅かすもの、または豊かにするもの
セッション４：文化遺産の保存と継承
パネルディスカッション２：「文化遺産の持続可能な保存」
12/21　総合討議

参加費：**Ａ会員**　5,000円（資料代、茶菓）/**Ｂ会員**　10,000円（レセプション参加費含）
申込方法：一般の方の参加を募集しますので、奮ってご応募ください。往復葉書（往）に会員種別、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、（復）に返信の宛先を明記。締切は１１月１５日。
申込み/問合せ先：メールは必ず「50年シンポジウム」という件名でお願いします。
東京国立文化財研究所　国際文化財保存修復協力センター　保存計画研究指導室
電話：03-3823-4085　/　FAX：03-3823-4867
E-mail：kokusen@tobunken.go.jp

（松本　修自）

第１５回「大学と科学」公開シンポジウム「世界の文化遺産を護る」

標記の公開シンポジウムが下記の通り、開催されます。このシンポジウムは日本イコモス国内委員会も後援団体の一つとして加わります。

日　　時：２００１年1月２７日（土）～２８日（日）
会　　場：有楽町朝日ホール（東京）
東京都千代田区有楽町2-5-1　有楽町マリオン11階
申込方法：①参加日時、②氏名、③電話番号、④郵便番号・住所（勤務先/自宅）、⑤職業（勤務先）以上をご記入のうえ、E-mail、FAX、葉書にて事務局までお申し込みください。参加費は無料。申込者には資料引換券を郵送いたします。なお、希望者多数の場合は、抽選となりますので、ご了承ください。
申込み先：（株）クバブロ内「世界の文化遺産を護る」事務局
〒102-0072　東京都千代田区飯田橋4-6-5　TH第四ビル４階
電話：03-3238-1689　　FAX：03-3238-1837
E-mail: webmaster@kuba.co.jp　http://www.kuba.co.jp

（斉藤　英俊）

日本イコモス国内委員会２０００年次総会

会員の皆様に申し上げます。日本イコモス国内委員会の規約に従い本年次総会を下記の通り開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席ください。

日　時：　２０００年１２月１６日（土曜日）　午後１時～３時３０分

場　所：　学士会館・本館　３０２号室
東京都千代田区神田錦町３－２８　　電話 03-3292-5931

議　事：　報告　１）２０００年次一般報告
２）２０００年次会計報告
３）２０００年次会計監査報告

審議　１）新規入会者および退会者の承認
２）国際専門分科委員会委員の選任
３）次期役員（委員長・理事・監事）の選任
４）事務局の移転
５）２００１年次活動方針
６）２００１年次予算案

協議　１）国際専門分科委員会活動への今後の対応
２）その他

総会に引き続き研究会を開催する予定です。その細目については総会開催通知に同封して案内状を後日お送りします。併せて是非ご出席ください。

次期役員の選任に関するお願い

次期役員（委員長・理事・監事）の選任は日本イコモス規約第14条に則り総会において行いますが、その手続に関して成文化された規定はありません。理事会において慎重審議のうえ「案」を作成し、これを総会に上程するのが従来の慣例です。今回も基本的には慣例を踏襲しますが、理事会における慎重審議に資するため、下記により、会員の皆様に適任者の推薦をお願いいたします。是非ご協力ください。

被推薦者数：　委員長適任者　１名以内
理事適任者　　５名以内
監事適任者　　２名以内

推薦方法：　自薦／他薦ともに可
形式自由　ただし署名・捺印のうえ封書にて郵送のこと

郵送宛先：　日本イコモス国内委員会事務局

提出期限：　２０００年１０月２５日　必着

理事会は１０月２８日開催の本年第４回会議において本件にかかわる審議を開始する予定です。以後、推薦者／被推薦者に対し理事会構成メンバーが口頭あるいは書面でご相談する場合がありますので、あらかじめご了承ください。もちろん関係者のプライヴァシーの保護には十分留意いたします。

（委員長・石井　昭）

日本イコモス国内委員会・理事会　JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President	委員長	石井　昭	Akira ISHII
Trustees	理　事	稲葉　信子	Nobuko INABA
		上野　邦一	Kunikazu UENO
		岡田　保良	Yasuyoshi OKADA
		近藤　公夫	Kimio KONDOH
		田原　幸夫	Yukio TAHARA
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		藤木　良明	Yoshiaki FUJIKI
		藤本　強	Tsuyoshi FUJIMOTO
		前野まさる	Masaru MAENO
		宮本長二郎	Nagajiro MIYAMOTO
		宗田　好史	Yoshifumi MUNETA
		安原　啓示	Keiji YASUHARA
		山田　幸正	Yukimasa YAMADA
		渡辺　保弘	Yasuhiro WATANABE
Auditors	監　事	石澤　良昭	Yoshiaki ISHIZAWA
		木原　啓吉	Keikichi KIHARA
Advisors	顧　問	伊藤　延男	Nobuo ITO
		稲垣　栄三	Eizo INAGAKI
		坪井　清足	Kiyotari TSUBOI

小委員会　WORKING GROUPS

Chiefs	主　査	益田　兼房	Kanefusa MASUDA
		羽生　修二	Shuji HANYU
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		稲葉　信子	Nobuko INABA

国際諸委員会参加者　REPRESENTATIVES TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Executive Committee	西村　幸夫	Yukio NISHIMURA
Advisory Committee	石井　昭	Akira ISHII
Specialized Committee on:		
Archaeological Management	小野　昭	Akira ONO
	岸本　雅敏	Masatoshi KISHIMOTO
Structures	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
	坂本　功	Isao SAKAMOTO
	西澤　英和	Hidekazu NISHIZAWA
Historic Towns and Villages	福川　裕一	Yuichi FUKUKAWA
	上野　邦一	Kunikazu UENO
Underwater Cultural Heritage	荒木　伸介	Shinsuke ARAKI
Training	稲葉　信子	Nobuko INABA
	工楽　善通	Yoshimichi KURAKU
Historic Gardens and Sites	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
	本中　眞	Makoto MOTONAKA
Vernacular Architecture	前野まさる	Masaru MAENO
	大河　直躬	Naomi OKAWA
Wood	村上　裕道	Yasumichi MURAKAMI
	伊藤　延男	Nobuo ITO
	松本　修自	Shuji MATSUMOTO
	渡辺　保弘	Yasuhiro WATANABE
Earthen Structures	岡田　保良	Yasuyoshi OKADA
Cultural Tourism	宗田　好史	Yoshifumi MUNETA
	石井　昭	Akira ISHII
Legal Issues	河野　俊行	Toshiyuki KONO
Photogrammetry	西村　康	Yasushi NISHIMURA
Cultural Corridors	杉尾　邦江	Kunie SUGIO
Stone	西浦　忠輝	Tadateru NISHIURA
Risk Preparedness	益田　兼房	Kanefusa MASUDA

JAPAN ICOMOS INFORMATION
Vol.4, No.12　25 Sep. 2000

日本イコモス国内委員会　委員長　石井　昭
事務局　担当理事 渡辺保弘　職員 我妻綾子
〒169-0072 東京都新宿区大久保 3-9-5-113　(株)文化財工学研究所 気付

JAPAN-ICOMOS OFFICE
c/o Bunkazai Kougaku Kenkyusho
3-9-5-113 Okubo, Shinjuku-ku, Tokyo 169-0072, Japan
Tel.03-3200-9355　Fax.03-3200-9423